
3輪の花

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3輪の花

【Nコード】

N4547Q

【作者名】

あると

【あらすじ】

美しすぎる姉は双子。

誰にでも好かれる姉さん達に比べて私は平凡な妹。

王女様とそっくりな姉さん達は魔法使い。でも、私には何もない。期待なんてされたくないし、私は今のままがいい。

でも……そういうわけにはいかなかったんだよねあー

姉

ひざまでは軽くある、長い長い薄紫の髪。その髪は陽に透ければ
光り輝き、見るものを虜にする。

曇りのない青空のような、真っ青で大きな瞳。じっと見つめれば、
その瞳に吸い込まれそうになる。

小さく、高い鼻。優しげな口元。深いえくぼ。ピンク色の頬は雪
のような透明さを持つ白さの肌の上ではよく映える。

整えられた身体のライン。そのラインがしっかり見えるような、
細身の衣服。

街を歩けば、行く人行く人が振り返る容姿を持ち、さらに、優し
く、強気であり、思いやりのある、誰にでも好かれる性格。

ねえ、なんで姉妹でこんなに違うものなのかな？

むう……

妹の私でも、惚れ惚れしてしまう。

こんな姉は、私の自慢の、双子の姉だ。

姉（後書き）

あるとです。

「国壺」と、同時進行していきます！

頑張ります！！

私と姉

私と姉は違う。

そのことをわかってもらう為にまず、私と姉のことについて話そうと思う。

私の名前はチアミノ。みんなにはチャミって呼ばれてる。チアミを早口で言ったら「チャミ」だかららしい。2人より少し短い髪を頭のとっぺんで黄色のリボンでくくっている。

長女はエアリー。長い髪を右耳の横で赤のリボンで1つにくくっている。

次女はメアリー。メアリーは、長い髪を左耳の横でピンクのリボンで1つにくくっている。

髪型で見分けてる人が多いから、髪形を変えたらどっちがどっちかわからなくなる。私はさすがにわかるけどね。

私と2人は、まあまあ似ている。確かに、私のほうが5センチくらい髪が短くて、髪の輝きは少し褪せていて、目はそこまで真っ青じゃない。鼻は少し2人より低くて、目はちょっと小さめ。

性格は2人の性格から正義感を少し減らして、少し尖らせて、めんどくさがりにした感じ。

私は、さっき2人とは違うって言ったけど、それは知名度のこと。

別々でいたら間違えられるほどなのに、一緒にいたときは……この扱い方の違いは何よ……（汗）

私と姉の最大の違いは、こんなことなんかじゃない。

2人は、魔法が使えるのだ。

私と姉（後書き）

あるとです。

説明文、書くの嫌いです……

魔法（前書き）

世界説明です。

読みにくいと思いますが…

魔法

『魔法』

……それは生前より持っていた魔力を使って起こす、『ふしぎなちから特異能力』

人は、みんな生まれたときから少しの魔力を持っている……らしい。正直言って、はっきりは知らないけど、どんな本を読んでも、誰に聞いてもみんな言うから、きっとそうなんだろう。

みんな魔力は持っているのに、魔法使いは世界でも少数。なぜって、『魔法』を使うには、桁外れの魔力が必要だから。ま、少し他の人より魔力が多ければ、占い師とかになれるんだけどね。

大抵、魔法が使えるのは王族とか、お偉いさんだけ。なんか、神に愛されて生まれた人は、生まれたとき、首筋に神様の文字があるんだとか。見たことないから知らないけど。

って言っても、それがなくても使える人は使えるんだけどね。

魔法を使える人は、国を治めることができる、とも言われてる。スーケールが大きくてあんまりわからないけど。

メアリーとエアリーは、2人で1人の魔法使い。1人では魔力が足りなくて、魔法が使えないんだって。よくわかんないけど。

普通、『2人で1人』って言うのはありえないのよね。でも、双子だからできるの。それぞれ少しづつみんな違う『魔力』が、2人

はほぼ同じだから。同質の魔力は合わせて、1つにすることができ
る。

なんか近所の占い師のおばあちゃんが言ってた。

普通はありえないのよ。私達みたいな、身分の低い孤児が魔法を
使えるなんて。

でも、私はなぜ2人が魔法を使えるか知ってる。エアリーも、メ
アリーも。私達姉妹はそのわけを知ってる。もちろん、私達の両親
も。

父親は10年前、母親は3年前に消えてしまった。

当時4歳と6歳の娘3人を残して……

魔法（後書き）

お久しぶりです、あるとです。

こんなにするつもりはなかったんですが…。

どうなるんでしょう…？？

10年前

「食べるものが……」

ない。」

これは、10年前、お母さんが毎日毎日言っていたこと。当時、私達家族はすごく貧しかった。1日1食パン1枚。ほんとうによく生きれたなっというくらい。私達が女だったのは幸いだっただろう。

毎日お父さんは朝早く出て行って夜遅く帰ってくる。仕事を求めて歩き回ってるらしい。

「ねえ、エアリー、メアリー、魔法で何とかできないの？」

「無理よ、お母さん。メアリーは栄養失調でもう5日は目を覚ましてないわ。それに私達の魔法はこういうことに使えないのよ。死の直前で、ようやく使えるのよ。人の命がかかったら使えるのにねー」

「つてことはまだ生きれるのかしらねえ」

毎日のこういう会話に当時の私は飽き飽きしていた。

「おなかすいたねえー」

思わずそういたら、お母さんに怒られた。

「我慢なさい」

エアリーがいきなり言った。

「ねえ、お母さん、私達の魔法^{チカラ}って、何なのかな」

それを聞いたお母さんは、エアリーの肩を掴んだ。

「あなた達はきっと将来、この国にとって大切な子達になるわ。あなた達は、なんとと言っても生き延びるのよ」

エアリーとメアリーは特別な子。

私は普通の子だから何も言ってくれないの？

10年前（後書き）

あるとです。

！……！
いつの間にか5件もお気に入り登録してくださってるなんて……

光栄です！！

これからも頑張ります！！

真実

ある夜のことだった。

私は隣の部屋から聞こえてくる話し声で目が覚めた。
お父さんとお母さんだ。

「もう、無理です。隠し通すのも難しくなってきたんです」

「……それは俺も知っている。あの子達も、勘付きだしている。……特に、エアリーがな」

「もう、話しては……」

「っ……だめだ！ まだ早い……特に、チアミノがな。まだ4つなんだ。2人には王宮の記憶があるかもしれないが、チアミノは記憶がない。もう少し、大きくなってからでないと……」

……？

「そう……ですね……」

「お前にはいつも迷惑をかけて……すまない。本当の母親ではないというのに……」

「いえ……皇太子妃様と約束しましたので。皆さんを立派に育てる……と」

……………どういうこと……………？

お母さんは、私達のお母さんじゃないの……？

「しかし、此処がばれるのも時間の問題でございます。場所を変えられては……？」

「……いや、あの子達が不振がる。しかし……俺の命に代えてもあの子達とお前は守ってやる。お前には苦勞をかけているし、あの子達は何も知らないのだから」

「あ、あなた様も生きなくてはなりませんっ！！ たとえ、たとえ……

皇太子様があなた様のお命をどれだけ狙っているようにも」

……つまり、お父さんは皇太子様に命を狙われてるの……？

………なんで？………

「……もう寝よう。夜も遅い。あの子達が起きてしまう」

「……はい……」

「……明日も、仕事を探してみる」

「……皇太子様の弟君でもあろうお方が………そういうことは、私が
させて頂きますのに……」

「……城で小間使いをしていたお前に、あの子達を任せているのだ。
不慣れなこともあるだろう？ お前にだけ苦勞をさせるわけにはい
かない」

「………そうですか………では、お休みなさいませ」

「ああ、おやすみ」

……なんか……すごいことを聞いてしまった気がした。

真実（後書き）

お久しぶりです。あるとです。

お気に入り登録がすつごく増えたことに、驚きと喜びでいっぱい
です！！

これからも頑張ります！

（更新、遅くなるかもしれませんが……）

本当の母親

2人が、寝るために私のいる部屋に来た。

部屋と言っても、1部屋しかなかった小屋を、布で2つに分けた
だけなんだけど。

それはともかく、やばい……よね？

私は大急ぎで布団にもぐった。

間一髪、布団に入った瞬間にお父さんが部屋を分ける布を持ち上げた。

そのとき……

「お父さん、お母さん、今の話……なんなの？」

「っ……エアリー！」

エ、エアリー?!

き、聞いてたの?!

「エアリー、お前聞いてたのか?!」

「うん。つまり、お父さんは皇太子様の弟なんだね?」

「……………そうだ」

「……………お母さんが、私たちの本当のお母さんじゃないなら、……………誰が私たちのお母さんなの?」

「知りたいのか?」

「……………うん」

「たとえば、自分の命が危険にさらされてもか」

「私たちが死ぬと思うの? 魔法も使えるのに?」

「……そうだったな。もう話してもいいか……チアミノ、起きているのだろう？」

う……ばれてる……

身体を起こすと、お父さんがあきれた顔をした。

「メアリーも起きているんだな……」

いきなり、メアリーが起き上がった。

「お腹すくから、ずっと寝てたんだけど、さっきので目が覚めちゃった」

「そうか……じゃあ、話してやろう」

全員がお父さんに注目し、口を閉じた。

「お前等の本当の母親はな……………」

皇太子妃…………… 俺の兄の妻だ」

.....え?.....

本当の母親（後書き）

あるとです。

次話は、3人の出生についてです。

姫君

……信じられない……

つまり、私達は王女なの……？？

けれど、次に父さんの口から出てきた言葉は……残酷な事実だった。

「お前達は、俺と皇太子妃の子供……つまりは、皇太子妃の不倫相手の娘だ」

うわぁ……

そのあと、父さんが話してくれたことをまとめると……

皇太子である兄に嫁いできた女性は政略結婚で愛はなかった。

でも、兄はその女性　―リオン―（本物の母さんだけど母さんって感じしないしなあ…）　に、べたばれだったとか。

そしてリオンに惚れたのは皇太子だけでなく……父さんも惚れたんだって。

つまりは兄弟そろって惚れたと。

んで、リオンは皇太子様より父さんを好きになったとか。

で、皇太子様あとつぎの子供より先に、エアリーとメアリーを生ませちゃったとか。

そのあと、ちゃんと跡継ぎとか、正統な血筋の子供は生まれたらしいけど。

でも、私が生まれたとき、ちょっと父さんとリアンの仲を疑った皇太子様が、私を含めた子供全員の検査をしたら、エアリーとメアリー、そして私は父さんの子だということがわかって……

皇太子様激怒。

当たり前だけど。

リアンがいくら父さんをかばっても皇太子様は信じなくて、父さんは死刑になりかけたらしい。

でも、リアンがギリギリのところでも母さんに私達をたくし、父さん、母さん、そして私達3人を逃がしたらしい。

で、今も皇太子様は父さんを血眼になって探していると。

「まあ、兄が探しているのは俺だから、お前等の命が危険にさらされることはないと思うが……。一応は用心してくれ」

私達は呆然としていた。だって、寝ている間に見つかって、父さんは殺されるかもしれないんだよ……？

「怖い……」

エアリーが、涙目になってメアリーと抱き合う。

父さんは私たち3人をぎゅっと抱きしめ、

泣いた。

「……すまない……大人の……俺達の勝手でお前達にまで迷惑をかけて……本当にすまない。」

けれど、俺はたとえ死のうとも、お前達だけは守る。これだけは約束しよう」

しばらく4人、
ずっと抱き合って泣いた。

姫君（後書き）

お久しぶりです
あるとです。

すいません、今テスト期間中で更新できませんでした。

次話は、おそらく1週間後になります……申し訳ありません!!

学年末テストで最近点数落ちてるんで…!

消失

「……あれ、寝てた」

いつの間にか泣き疲れて寝てたみたい。起き上がってみて、布団を着ていたことに気付く。つまり、誰かが寝かしてくれたんだ。

……みんなはもう起きてるかなって隣の部屋に行く。ちょうどそのとき、家のドアが閉まった。

誰が出てったんだろう？

ドアを開けて外を出てみたら、父さんが走り去っていった。

「と、父さんっっ?!?!」

思わず叫んでしまった。でも、父さんは振り向きもなかった。

なんか、怖かった。もう、2度と会えない気がして。

恐ろしいことに、私のその不安は当たってしまった。

父さんはいつまでたっても帰ってこなかった。

3日経っても5日経っても……………

「父さんはどこ行っただの？」

「母さんっっ?! ねえ?!」

誰も、父さんの行方は知らなかった。

「……もしかして……」

あることに気づき、私達はハッとした。

「城に……行ったの？」

消失（後書き）

お久しぶりです、あるとです!!

ようやくテスト終わりました!!

これからも頑張ります!

城の戦い

「誰だ、貴様！……！」

城に近づくと、門番2人が叫んできたから適当にあしらう。

「俺を知らんか。はっ…あっはっは！……！」
「……？？？」

「俺の名はマラオス。マラオス・デュセール。名を知らんとは言わせねえぞ」

「ま……まさか……！！！！！！ マスキオ様の……」

「ご名答。皇太子の反逆者…元王族、マラスオ・デュセールだ」

これでもかっこつけたつもりだが…いきなり槍突き出すのは無礼だろ。まあ、忠実な奴なら普通だろうなあ…

「なあ、ちょっと入れてくれよー」

「無理だ！！」

「入れはしない！！」

「なんだよー折角来たのに…」

「おまえらあ!!!!!!!!!!何やってんだあ!!!!!!!!?」

この声は…

サークレイ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ぐっ、軍隊長殿!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「マラオス様!! お久しぶりですなあ!! 大分お変わりになられた!!」

「久しぶりじゃないかサークレイ!! ちょっと聞いてくれよオイ。俺はな、ちよつとばかり、マスキオと話したいだけなんだけどよー、こいつ等が入れてくれねえの。なあ、お前の権限で入れてくれねえ?」

俺が言うと、大きなため息とともに答えるサークレイ

「あんなことをしといてよくもまあ来れたものです…まあ、話くらいなら：　下がれ、お前等」
後半は門番に。

「変わってねえな。ここは」

「まあ、当たり前ですけどね。ああ、訓練所、見て行きますか？」
「おう、行く行く」

「そうそう、最近新しく騎士希望の少年^{ガキ}が来たんですよ。遠い村から1人で来た4つの」

「よく中に入れたな」

「フィオ様のご命令ですよ」

「…へえ…」

訓練所についたときだった。

「サ一様一ー一ー一ーつつ！一！一！一！一！一！一！一！」

駆け寄ってくる少年。茶色い髪に緑の瞳。年はチャミと同じくらいか。

「サー様、俺、リヨウを倒せました!!」

「ナイト、話はそれだけか？」

「はい、一刻も早くサー様に報告をしたかったのです!!」

そのナイトと言う少年の表情はすごくなんていうか……誇らしい顔
??

「ボケー……！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

サークレイの大声で、ナイトの表情が凍る。

「え、あの、サー様？」

「お前は、客人も見えんのか?!」

俺を手で示し、サークレイ、ナイトの説教タイム。

この剣幕、これで40か。身のこなしとか声量はまだ20代だろう…

「サークレイ、そんなもんにしてやれよ。俺にはかまうな」

「そうは言っても…少しお待ち下さい」

また説教タイムが始まる…

城の戦い（後書き）

お久しぶりです。

私情で、禁止令出されて更新できませんでした。

東日本大震災での被災地の皆様の、一人でも多くの方が無事でありますよう、祈っています。

（ちなみに私は関西人なのでぴんぴんしています）

城の戦い？

「も、申し訳ありませんでした…マラオス様…」

「い、いいよーそんなん（汗）」

泣きじゃくる少年^{ガキ}に言われちゃあなあ…

「申し送れました。私の名はナイト。ナイト・エリユ―と申します。
よろしく願います」

「俺はマラオス。よろしくな、ナイト」

「はい!!」

元気のいい奴だな

「マラオス様、行きましようか」

「おう、じゃな、がんばれよ」

「はい!! 失礼します」

ナイトが走っていく先にた少年がナイトを木刀で切りつける。ナイトは軽くそれを交わし、少年の足を払う。しかし、少年が跳んだので、空振り。少年は着地ざまに突き。ナイトはそれを紙一重で交わす。

「なかなか強いな、あの2人」

「ああ、あの少年はコラッジョ・チーマ。リウジュ・チーマの息子ですよ」

「?! あの能天気のか?! ……似てねえな」

「母親似ですよ。でも、才能は父親譲りですが」

「あの2人は同じ年か?」

「ええ、4歳です」

「ライバルだろう?」

「ええ、ライバルです」

「きっと強くなるな、ライバルがいると強くなるもんだ」

「いなかったくせによく言いますね」

ムカツ

「俺にとっちゃマスキオがライバルだったんだ!!」

「ええ、知ってますとも」

「……な、いるだろ??!!」

「年上ですよ」

「…関係ない!!」

「はいはい」

くそお…年の功か…?!

「とりあえず、王座に行きますか? 今、マスキオ様は王座にいらっしゃるはずですから」

「ん」

「…すねてももうかわいくないですよ」

「すねてない!!」

「…そうですか」

つくっそう…完璧に馬鹿にした目だ…!!

俺は一回もこいつに口喧嘩勝ったことないな…

ついに一回も……か。

城の戦い？（後書き）

あるとです。

ちょっと意味深な感じに終わらせようとしたが…失敗です。

これから頑張って書きます！！

城の戦い？

「マラスオおじ様!!」

甲高い声と共に駆けて来たのは、第1王女、フィオーレ・デュセール（5）。つまり、俺の姪っ子。

エアリーたちに負けず劣らず、愛らしい。俺達が城にいる間は、すんげえかわいがってやった。だからか、俺によくなっている。まあ、人見知りしない性格だからかも知れないが…

「大きくなったな、フィオ!!」

高い高いをしてやると、キャツキヤと喜ぶ。リオンによく似た顔はとても美しい。こりゃ、将来は美人決定だな。

「おじ様、私、最近少し、魔法が上達したの!! やっぱり、ジョイアみたいにはできないけど…」

「？ フィオの魔法はなんだったっけ？」

「病気を治したりできるの。ちゅりよくって言うんだって」

治癒力だな。

「そうか、じゃあ、怪我をしたら治してもらおうか!!」

「いいよ!!　まだ、セーブできないから、逆に傷深くなったりするけど」

…………おい

危ねえじゃねえか!

「実は私がその『治癒に失敗した人』ですけど」

マジか。大変だったな、サークレイ(汗)

「それで、おじ様はなぜ来てくださったの？」

「俺か？　俺はお前の父上に会いに着たんだ。だから、後でな」

行こうとすると、服を引っ張られる。

「いやっ!! 今遊んで!!」

「言うことを聞いてくれよ…お前の父様は、俺がお前と接するのを嫌っているんだから」

「何で?!」

フィオはまだ小さいし、何も不自由なく暮らしてきた子だから、なぜ俺が王宮を追い出されたかを知らない。だからこそ、俺に自分から接しに来る。

言うことを聞かないフィオにお手上げな俺は、サークレイに助けを求める。

「ラッジ! ナイト!」

サークレイが一声呼ぶと、さっき別れたばかりのナイトと、対戦していたコラッジョの2人が瞬時にやってくる。

「2人で、フィオ様の遊び相手をしてやれ」

「「はい!!」」

そしてフィオのほうに向き直り、2人でフィオの手をとる。

「さあ、参りましょう!!」

2人につれられ、遠ざかるフィオ。

太陽に透けて光るフィオの紫の髪が角を曲がり、見えなくなるの
を見届けてからサークレイと共にその場を後にする。

クラッジョの黒髪と、ナイトの茶髪がたまに見え隠れするその角
に、祈る。

――フィオを頼むぞ――

そして、王宮に入り、王座を目指す。

そして、王座のある部屋の扉が開き、俺は覚悟を決めた。

城の戦い？（後書き）

あるとです。

ようやく、第一王女様が出てきてくれました。

本当はもっと書きたかったのですが…削りました。

これから頑張って書きます

城の戦い？

「マラスオ……！！！」

部屋に入った途端、兄、マスキオが俺に対して殺気を放つ。

「おい、やめろよマスキオ。怖えじゃねえか」

「だまれ！！！！ おまえ、よく城に顔をさらせたな！？ お前、自分に賞金が掛けられていることを知らないのか？！」

「知っている。だからこそ来たんだ。少し、言いたいことがあってな。心配するな、もう逃げはしない」

話している間に、大勢の側近騎士に槍を向けられ、囲まれる俺。先端が怖い。体との幅、10cmもないだろう。

「言いたいこと、一つ目」

少し間をおき、俺は続けた。

「マスクオ、お前とリオンに誤りたかったんだ。……すまない。俺は、大変なことをしたと思っている。本当にすまない………!!」

まず方膝を付き、両手を地面につける。そして、もう片方の膝も付き、頭を下げた。

その行動に、その場にいた全ての人間が凍りつく。

「……負けず嫌いのお前が頭を下げるとはな……」

さっきまで俺に向けていた殺気がシュシュシュとしぼんでいく。

が、すぐにムクムク殺気が膨らむ。

「2つ目だが……」

顔を上げ、マスクオの目を見つめ、俺は言った。

「俺の3人の娘のことだ：頼む、そつとしいてやってくれないか。俺の娘だからと言って、3人も殺す、そんなことをしないで欲しい」

「なんだと…？ 娘を？」

「面倒を見ろと入ってない。殺すなど言っているんだ」

「……わかった。というか、わかっている。俺はそんなに外道ではない」

「そうか。それもそうだな」

「もう言いたい事は言ったか？」

「いや、もう1つ報告がある」

「なんだ？」

「3人の魔法についてだ」

ドサッ！！！！！

いきなり、マスキオが椅子から落ちた。

「ま、魔法？！」

「ああ」

「魔法をお前の娘が使える?!　つまり、国を治める権利があるというのか?!」

「まあ、そういうことだろ」

「ありえない!!　反逆者の娘が国を…??　なんだと…??」

「上の2人の娘は2人で1つの大魔法を使う。下の娘はまだ魔法は使えない。だが、本人が気付いていないだけで、あいつは強力な魔法を持っている。もし、国が大変になったら城に呼んだらいい。俺の言いたいのは以上だ」

「……そうか。もう言いたい事は終わったのだな」

目が怖いぜマスクオさんよお。

「マラスオを牢へ!!　5日後、公開処刑を行う。時計広場だ。」

国中に広めろ!!」

「「「はっ!!!!」」」

こうして俺は、牢に入った。

5日後の公開処刑を待つ為に。

城の戦い？（後書き）

あるとです

さて、マラスオは死んでしまうのか？！

次話は処刑編です。

※血がある場合は、前書きに書きますので。

公開処刑

「叛逆者マラオスが捕まったぞ――！！！！！！！！！」

父さんが消えた次の日、私はこの大声で目を覚ました。

隣の部屋で朝食の用意をしていたメアリー、エアリー、母さんの動きが止まる：のが、気配でわかった。

ガッシャーン！！！！！！

急いでいってみると、母さんの足元に、包丁が垂直に立っている。あと数センチずれていたら確実に足に刺さっていた。

けれども、3人は困惑の顔をしたまま固まっている。

そしていきなり泣き出した。

「やっぱり…やっぱり城に行ってたんだ！！！！
あの時、止めれたら…そしたら父さんは…！！！」

エアリーが叫び、崩れ落ちる。

その間も外ではさまざまな声が上がっていた

「4日後に広場で公開処刑だそうだ」

「反逆者が捕まって、マスキオ様も少し落ち着かれたみたいだな」

「結構長い間逃げていたからなあ」

「公開処刑は絶対見に行くぞ！」

「反逆者の末路だ」

「元は王族だったのになあ…」

「マラスオはいい人だったんだろ？」

「リオン様に手を出したからいけないんだ」

「リオン様は次期皇太子妃だからな」

「ああ、いい人でも反逆者は反逆者」

「処刑されて当たり前だ」

耳をふさぎたかった。

悲しかったし、悔しかった。

メアリーなんて、下唇噛んで怒りをこらえて血出たりしてた。
母さんは何も聞こえてないみたいだったし、エアリーは今にも飛び出しそうだったから押さえ込んだ。

「4日後…公開処刑…」

エアリーがつぶやくと、母さんが叫んだ

「いや…!! 絶対に、絶対行きたくない!! どうして…なんで城なんかへ行ったのですか…マラスオ様っ…!!」

行きたくないのは、みんな一緒だった。私だって行きたくない。

でも……

「私、いくよ」

気付くと私は声に出して言っていた。

「「なっ…!!」」

非難を浴びそうになった瞬間、私は急いで言った

「私ね、一昨日、父さんから話し聞いてるとき感じたの。何かの覚悟。今思ったら、それが死の覚悟だったんだと思うけど…：…それでね、こう言われてる気がしたの。」

…「俺は、誇り高く死ぬ」って」

そう、確かに感じた。誇り高く死ぬ為の覚悟を。

「だから…だから、父さんが誇り高く死ぬなら、その死に様が素晴らしいと思えると思うから、これが私の父さんだって誇れる死に方なら、辛くても、私は見たい。父さんが、どんなに誇り高く死ぬのか…倒産の覚悟を、見たいの…」

途中で何を言っているのか何を言いたいのかわからなくなったけど、エアリーは解ってくれたみたいで、はっとした表情になった。

けれど、メアリーは怒った。

「感じたから…？ 感じたから、自分の父親の死を見たい?!?! 狂ってるわ!! 親の死が見たいなんて…!!」

メアリーが怒るのも納得がいく。でも…

「私は父さんの死を見たいんじゃない。誇りが見たいの！！父さんの誇りが見たいから行きたいの！！」

涙があふれ、前が滲む。メアリーの顔が歪んで見えた。

涙が頬を伝っても私はなお続けた。

叫ぶように。メアリーにあの時感じた父さんの覚悟を。

「私は、父さんが大好きなの！！だから、きちんと見守ってあげたい！自分の知らないところで大好きな父さんが死んじゃったら、父さんの最期を見れなかったこと、見守れなかったこと、一生後悔すると思う。だからっ……！！！！」

公開処刑（後書き）

あるとです。

次話、いよいよ処刑の日！！！！

と言うわけで、気合入れます！！

運命の日

処刑日の朝、私達は顔を隠しながら広場に向った。

楕円形の広場の真ん中にギロチンっていう一般的な処刑台。それを取り囲むように集まった大勢の人々。

背の低い子供の私達は処刑台に一番近いところに重ねてあった段ボール箱に登っていた。

私は立ち上がってギリギリ見えるくらい。人の動きによって台が消えたりする。

エアリーメアリーは立って普通に見るみたいで、私みたいに背伸びしたり、なんてことはしていない。

「やっぱり、見たいって言うものじゃないわ…」

ダンボールのすぐ下にいる母さんがつぶやく。私にしか聞こえなかったみたいだけど、2人とも考えてることは一緒みたいで、表情は曇っていた。

*
 *
 *
 *
 *
 *
 *
 *

俺の命も残り30分を切った。けれども鼓動は落ち着いている。なんか不気味。

とりあえず牢の前にいる見張りの兵に話しかけてみる。

「なあ、お前、子供いる??」

⋮

「答えてくれたっていいじゃないか」

「……いるが……それが？」

めんどくさそうな声。でも俺はかまわずに続けた。

「何歳？」

「4歳と、5歳」

「へえ！俺にもいるんだぜ！6歳が2人と4歳が1人」

⋮

「この国の子供^{ガキ}ってなんか脳の発達が早いだろ？ 俺の子供ってなんかこの国の子供の平均脳年齢より高いっぽくて。早くからぼけ始まったりしてー」

笑いながら話してたら思いっきり不機嫌オーラ出してきたから思わず口を閉じた。

* * * * *

「出てきたぞー！ー！！！」

その声で、下に向けていた視線を処刑台に移す。ちょうど広場に父さんが入ってきたところだった。

「父さっ…」

叫びかけたメアリーの口をエアリーと一緒にふさぐ。親子だっばれたら私達まで殺されかねない。
それは、父さんも嫌がるだろうし。

私達が格闘している間に、父さんが処刑台に登る。

父さんが大声で叫んだ。

「俺は皇太子マスキオの弟、マラスオ。指名手配者でもある。自身、あほな事をしたと思っている。でも、これだけは言いたい。俺は、マスキオとリオンに対して、謝罪の気持ちを持っていた！そして、今も持っている！！ 本当に悪かったと思う。

そして今、みんなに約束して欲しい。どうか、……俺の娘を殺そうんと思わないで欲しい。頼む。

……俺が言いたいのは、それだけだ」

そして、処刑台に首を固定した。

大きな斧をつるしたロープを切る為、男の人が斧を振り上げた時、父さんと目が会う。

― 敵討ちなど、考えるなよ。 お前達は、すごい力を持っている。その力、この国のために使ってくれ。 ……生きてくれ ―

そう言われた気がした。

ロープが切られ、斧が落下する。

そのとき私は見た。父さんの顔がすごく穏やかだったのを。

そして見た。父さんが…

一瞬のうちに消えたのを。

そしていつの間にか、処刑台の一番上に一人の少年が青いマントを翻し立っているのを。

運命の日（後書き）

あるとです。

マラスオはどこへ行ったのか？！
この少年は誰なのか？！

全ては次話！！

告知ではあり…ます（笑）
↑？

王族の魔法

「「「?!」」」」

父さんがいきなり消えて、民衆が騒ぎ出す。そのとき、1人の少女が処刑台の上の少年を見つけた。

「あれは…!!」

少女の声に、他の人たちもその存在に気付く。

そして口々にその名を言う。

「ジョイア様だ…!!」

「第1王子のジョイア様だ…!!」

そう。その少年とは王家始まって以来の天才児、第一王子のジョイア・デュセル様（4）だった。

私みたいな子供でも知ってるんだから相当。王家だから当たり前だけど。

そのジョイア様が叫ぶ。

「お前等ふざけてんのかっつ?!?!」

「「「「??!?!?!?!」」」」

「マラスオは法を犯したと言えど元王族。その王族の処刑を喜ぶ?!
! どういうことだ?! それに、マラスオを罰するなら母上にも
非がある! それをなんだ?! 父上が怒ったから死刑? おかし
いだろ!! 普通に法に従って罰せば、国外追放の刑なだけ。殺す
必要はどこにも無い! そうだろう?!」

ジョイア様の言葉に、一人、また一人と意識を改めるのが分かる。
　　っていうか、よくあんな薄い板の上で力説ができるな! なんて
ことを考えている私はアホだ。

「この処刑は法に反している。そう判断したから私はマラスオを国
外へ追放した。……私の魔法で」

確か、ジョイア様の魔法は『移動魔法』に属する魔法。おそらく
『瞬間移動』^{テレポート}。

「実際はもっと早くに逃がすつもりだったがなかなか城を抜け出せなくてな。ほぼギリギリ：あと1秒でも遅かったら死にはせずとも負傷していたかもしれない。でもまあ、まだまだ魔法を制御できないからどこに飛んだかは不明だが」

……オイ。もしかしたら寒い北のほうの国に言ったかもしれない
ってこと？！

……でも、でも…

「よかった。父さん、生きてるんだね」

エアリーがつぶやく。隣でメアリーがうなづく。3人で顔を見合
わせると二人は泣いていた。うれし泣きか、その前に悲し泣きをし
ていたのかは分からない。でも、気付くと私も泣いていて、3人と
も泣き笑いの顔になった。

「だから：指名手配も解除だ。法に従い、マラスオは私が罰した。以上だ。何かあるか！！」

私と同じ4歳と言えど、さすがは王子。威厳がある。更に頭もいいらしいね。

「父上は私と母上でなだめる。叔父上も手伝ってくださいるだろう。叔父上は父上より私に味方してくださいるからな」

にやりと笑うと水色の少し長めの長髪とマンとを風になびかせ、一瞬にしてその場から消えた。

「瞬間移動」テレポートと言う言葉を残して……

王族の魔法（後書き）

あるとです。

マラスオ、第一王子ジョイアによって救出成功！！
よかったよかった。

血も一滴も流れませんでしたし！

これから頑張ります！！

花屋

ジョイア様が消えてから、広場から人が出て行く。

私達4人は人気の無くなった広場で立ちすくんでいた。

声にならない感動が4人を包む。私は思い出していた。いつだったか、父さんが私に言った1言を。

――お前は特別なんだ――

エアリーより、メアリーより、誰より特別なんだと。

隣でうれし泣きをして静かに抱き合う2人を見ながら、私は思った。

私が2人より特別なら… 2人は必ず私が守る、守っていく、と。

2人は大切な人だから、きっといつか、何か大きな危険が2人に降りかかる気がしたから。

……必ず、私が守る。

* * * * *

「いらっしやいませ!」

レジでうたた寝をしていた私は、エアリーの声で目が覚めた。

「おはよう、チーノ」

メアリーが10年前とは違う呼び方で私に話しかける。

「……夢見てた。父さんがいなくなったときの夢」

メアリーの表情が一瞬変わる。しかし、すぐに微笑み、両手でこめかみをぐりぐり。

「いたいいたい!!」

「話さない約束でしょ」

笑ったまま1言。逆に怖い。

普段は優しい2人でも、NGワードを言うと性格は一変する。

そのNGワードとは、「父さんがいなくなった日」「母さんが消えた日」。

笑顔でお客さんに接客をするエアリー。商品を並べるメアリー。
そんな2人を眺める妹^{わたし}。

レジのすぐ横にある花を一輪手に取り、特別な機械にかけ、香りだけを取り出す。

店に漂う甘い香り。落ち着くような、心安らぐ香り。店に並ぶどの花より強く、けれどもきつくない香り。お客さんもその香りに顔を綻ばせる。

城下町、レイズィー通り。大通りを少し離れた所にある1軒の小さな店。

営むのは3人の少女。

王家の血を引くとの噂も立つ華々しやうじやうたち。まさに3輪の花。

商品売るだけでなく、心も安らいでくれるという店。

花屋
くエルフく

沢山の花に囲まれる小さな少女と小さなお店。

花屋（後書き）

あるとです

まず、今回書くにあたって思ったこと。

「何書こう？」

と言うわけで、こんな変なことに…

脈作れるように頑張ります…（汗）

準備（前書き）

2部突入

準備

城である準備が整えられていく。

大きな1部屋が1つ、美しく生まれ変わり、見通しのよいバルコニーには鳥も舞い降りる。

彩られた室内には大量の花、花、花。

大きく立派な洋服ダンスは大量にあり、その1つ1つに入っているのは15歳くらいの少女用のドレス。目もくらむような派手なものからシンプルで、しかし美しいドレスまである。

同時にその部屋にある隠し部屋に大量の武器、鎧、盾などが入れられる。

立派な鏡、時計、テーブル、カーテン。

大量の本は部屋から直でいける書齋に。

何人かがいっぺんに住めるような部屋が完成した。

後は、住居人を待つだけである。

準備（後書き）

あるとです。

新章突入です。

脈があるといいなあと思いつながら（汗）

一息つくとき

「いらっしやいませ」

エアリーの声でお客さんが入ってきたことに気付く。

「いらっし…やいませ」

また来やがったこいつ…！！！！！！

本気でウザイ。キモイ。目がウザイしキモイ。なんか全体的に嫌
い。

一言で言えば……エロ親父。

いつもいつも毎日毎日店に来る。所謂、常連。

とはいえ、いつもエアリーメアリーをエロい目で見てる親父を常
連なんて私は認めない。

変なところで天然なエアリーはともかく、エアリーの危険に敏感なメアリーはあんまりよく思っていないみたい。エロ親父がエアリーを見つめる度すごい目つきで睨んでいる。

「いつものお茶もらえる？」

「……はい、かしこまりました」

頬を引きつらせながら営業スマイル。『いつもの』とか言わないでよ。キモイじゃない。

カフェもかねた花屋エルフ。ちよくちよくいろいろな人が来てる。

いろいろな葉と一緒に砕き、ティーパックをつくり、ポットにいれ、お湯を入れる。

嫌な思いを香りで安らげる。

そのとき、店に入ってきた一人の青年。

「はじめまして。私、チェーロ・ビアンカと申します。フィオーレ様の付騎士でございます。

マスキオ様の命より、あなたを迎えに上がりました。

……チアミノ様」

一息つくとき（後書き）

あるとです。

もっとほのぼのを入れようとしたのになぜかそのまま突っ走ることに…

城に…いけるかどうか…

運命は突然に…

「「……は？」」

いきなり言われた言葉に、思考回路がついていけない。

「あ、あの、何で私なんですか？」

思わず言うと、チェーロさんはエロ親父を横目で見て、少し困った顔をした。

状況を判断したエアリーが、メアリーに何か話し、私とチェーロさんを奥の部屋に通した。

「どうぞ。ハーブティーです」

向かい合って机に座った私とチェーロさんにお茶を出し、自分は私の隣に座るエアリー。

「ところで、どうしてチーノを城に？」

母さんが3年ほど前にいなくなって以来、ずっと私達をまとめてきてくれたエアリー。母親のような顔で聞く。

お茶を一口のみ、エアリーと私を正面から見たチェーロさんは、驚くような話をした。

「実は、城に来ていただきたいのは、チアミノ様だけではないのです。あなた方3人に来ていただきたいのです」

「「??!」」

思わず飲んでいたお茶を噴出しそうになる。それを何とかこらえ、聞いた。

「なら、何でさっき私の名前だけしか出さなかったんですか？」

「他のお客さんがいらっしやったからです。エアリー様、メアリー

様が城に来るのは、秘密にしておきたいのです」

「？　なぜですか？」

「これはこの国全体にかかわることなのです。貴女方にこの国の運命がかかっているのです。とくに、チアミノ様に」

いきなりの話に、やっぱり頭がついていけない。

「え、あの、どういふことですか？」

「王妃、リオン様の能力チカラをご存知ですか？」

私は覚えてなかったけど、エアリーが覚えていた。

「ああ…予知…でしたっけ」

「はい、リオン様の能力は予知。その予知の中の悪い予知を実現しないように避けること…それが、われわれ騎士団の役目の一つでもあります。そして今回、恐ろしいことが予言として視えたそうなのです」

「「悪い予言…」」

「はい、それは私達だけではどうにもなりそうに無いのです」

「だから、ここに？ でも、なぜ私たちなのですか？」

エアリーが不思議そうに問う。

「それは、王族以外で唯一魔法を使えるからです。そして……マラス才様のお言葉もありますしね」

……?!

父さんが残した言葉？

ていうか、その前に私は……

「あの、私は魔法を使うことができませんよ?!」

10年前、2人で一つしか魔法の使えなかったエアリーとメアリ。今では1人でも魔法が使えるようになり、2人で1つの大きな魔法を使うこともある。

でも、私は魔法を使えない。今も、昔も。

すると、この気持ちを読み取ったかのようにチエーロさんは微笑んでゆっくり首を横に振った。

「いいえ、貴女も魔法を使うことができます。魔力も持っています。

……それはもう、強大な魔力で、チアミノ様はエアリー様、メアリー様より、この国の誰よりも強い魔力を身体に秘めているのですよ」

運命は突然に…（後書き）

あるとです。

遂に、チーノが自分は魔法が使えると気付いた！？

次話はどうしましょう…？

店じまい

……パレードが開かれていた。城へ招かれる少女のために。

レイズィー通りは大勢の人で賑わっていた。

通りの真ん中を豪華な馬車が通っていく。

乗っているのは……チアミノ。花屋、エルフを営む3姉妹の末っ子。

なぜ彼女が城へ行くのか、姉のエアリー、メアリー以外は誰も知らない。

2人の姉は乗っていない。通りの端で妹を見つめる彼女等を見たのは、ほんの数人だった。

パレードが終わった幾日後、花屋、エルフは店をたたんだ。

理由は誰も知らない。けれども、互いを支えあって生きてきた3人。その妹が一人遠いところに行っただとすると、心配で店どころではなかったのだろう、と噂されている。

* * * * *

「「へ?..」」

― チアミノがこの国で一番魔力を持っている ―

その言葉に、3人の目は点になった。

ちょっと待って、ぜんっぜん理解できない。

「つまりですね、チアミノ様は魔法が開花していただいだけであって、実際、この国で一番の魔法使いと言うわけです」

ますますわかんない。え、つまり何、私も国を治める権利を持っていたってこと？

「とりあえず、この国の運命は貴女に懸かっているんです！ 貴女達3人に！！」

いや、懸けられても困るし。ってかなんで私なのよ、重荷じゃない。

「チアミノ様は確かにこの国一の魔法使いです。それは、^{チカラ}リオン様の能力で解っております。……しかし、まだ魔力が開花していないので、その開花と魔法の特訓、武器の使い方などをやっていただきたいので、城に来ていただきたいのです。」

エアリー様、メアリー様はその魔法で次期王位継承者、フィオーレ様を影で支えて頂きたいのです。これは、リオン様の願いでございます。

どうか、共に城にお出ましいいただきたい」

片膝を付き、立てている足のほうの手を腰に添える。反対の手は握り、立てた足の上にのせる。騎士流の挨拶の一種。

「……解りました」

私が未来を握っていることは解った。エアリーもメアリーも頷く。

でも、一つ疑問がある。

「私の役目ってなんですか？ エアリー、メアリーはフィオーレ様の支え、けれど…私は？ 武器を使うって…武術もするんですか？」

そう、私のやることって…何？

店じまい（後書き）

あるとです。

さて、2人の役目がわかりましたが…チーノ…どうやってまとめようか考え中です。

特訓

「はじめに、私と戦ってみましょう」

城に着くと同時に王座へ行き、王様、女王様に挨拶をした後、姫や王子に会う予定だったけど姫と王子は用事で城にいてなかったから、夕食の席で会うことになった。

それまで、私はチェーロさんと特訓、エアリーとメアリーは王様女王様と話していることになった。

訓練場につくと同時にチェーロさんに剣を渡され、冒頭に戻る。

「…え？」

「だから、戦ってみましょう」

にこり、と音のしそうな笑顔で見られ、思わず頷く。

「でも、私剣なんて使ったこと……」

「大丈夫です。みんな始めは使えないもの。あなたの今の实力を見

て、特訓のスケジュールを組みたいので」

……うつ…それは……

「まあ、とりあえずかかってきてください。来ないのならこっちら行きますよ？」

ぎゃー待って待って！！！！ 速い！ 怖い！ ……うーもうどうにでもなれい！！！！

チェーロさんが息を落ち着かせながら呟く。

「すい…」

チェーロさんがすごい速さで突進してきて剣を私に振り下ろしてから10分後、荒い息をした私と彼は向かい合っていた。

互いに無傷。

振り下ろされた剣を見た私は、思わずしゃがみ、そのままチェーロさんに突進。頭突きが彼のお腹に当たる直前、チェーロさんは剣を持っていない左手でそれを突っぱねる。

流れるように再び降りてきた剣を剣で受け止めはじく。手に氣をとられている隙に足を蹴り、バランスを崩させる。蹴られた足をそのまま私の剣に向って蹴り上げるチェーロさん。その足を私は手刀で落とす。

こんなことを10分くらい続けた後、チェーロさんが言った。

「すごい……本当に武術経験が無いのですか？」

「あ、ありません……けど」

「ありません。私は3歳から今まで15年間武術をしてきました。少し手加減したとはいえ、武術経験の無い人に此処まで押されたのは初めてです」

「つまり……？」

「……逸材です。何百年に一度かの。貴女は素晴らしい人ですね。魔力も、武術も、みな素晴らしい。天才とは、貴女のような人と言うのでしょうかね」

汗を拭きながら、人のよさそうな目を細くして微笑む。そして空を見上げ、ポツリと言った。

「この地球上で、一番偉いものは何か、解りますか？」

「？」

よく分からない。

「…自然ですよ。人工物ではない、空や雲、木や草花。そんな者達が一番偉いのです。一番偉いのは人間ではありません。人間は自然に生かされているのですからね」

逆光で輪郭だけが空色のキャンバスにオレンジ色に浮かび上がる。

「けれど、その自然さえも、今、貴女を尊敬しているようです。人の見方になるのは気まぐれな自然ですが、貴女にはいつも味方してくれるでしょう」

「あの、なんでそんなことが解るんですか？」

思わず聞くと、背の高い彼は私と同じ目線になるように少し膝を

曲げ、私の目を見ていった。

「遺伝ですよ。私の家系は自然と少しですが対話できるのです。対話と言うか：感じ取れる、と言うのが近いですが。私の髪は白いでしょう？ 白髪の子供は不思議な力を持つものです。私の家系はそれの究極系。私の先祖が、初めて不思議な力を持った子供だったんです。つまり、初代の魔法使いですよ」

え？

特訓（後書き）

あるとです。

チエーロはなんか好きです。いつの間にかこんなことになっていました。驚きました（汗）

王と王妃

チアミノがチェーロと訓練所へ行った後、エアリーとメアリーは王と王妃の前で固まっていた。

「……………」

王はじつと二人の顔を見て、女王の顔を見た。

「……確かに似ている」

マラスオと同じ面影を持つマスキオ王。思わず声に出してしまうメアリー。

「父さん……」

むっとする王。当たり前だろう。

逆に王妃、リオンはニコニコする。これもまあ当たり前だが…。

「あー…なんだ、お前等はマラスオの娘だよな？」

「は、はい!!　そうです」

いきなり声を掛けられ、驚くエアリー。

「…ならば…しかたない、お前等、養女になれ」

「「は?!」」

突然の話に思わず叫ぶ。

「まあ、普通そうなるな。しかし、仕方ない。まずは信頼関係が必要だ。仕方がない…それもこれもフィオーレとこの国を守るため。仕方ない……」

やたらと『仕方ない』が多い。

「でも、私達などが…」

「いいのよ。どうせ王家の血だから。ただし、国民には内緒でね」

語尾にハートマークをつけるようににっこり笑って王妃が言う。

「え…（んな適当な…）いいのですか。っていうか、なぜ国民には秘密なのですか」

メアリーが聞く。

「ん、敵を欺くにはまず見方から。もしもの為にね。ごめんね、あんまり詳しくは言えないの」

「「……」」

「とにかく、俺の娘だ。お前等3人とも」

頬を赤らめながら言うな。

照れ屋なのか、王は。

ぶっきらぼうなのはツンデレか。

エアリーは思わず心の中でつつ込んでいた

「まあ、なんだ、つまり、他の王子と姫とは兄妹だ。まあ、普通に接してやってくれ。特に、フィオーレと」

そのとき、王座の間の扉が開く。

王と王妃（後書き）

あるとです。

次、ようやくフィオーレ登場します。

多分。ええ、おそらく多分

フィオーレとメアリーが驚いて声を上げる。お互いに顔を見合わせ、また叫ぶ。エアリーに関しては、驚きすぎて声を出すのも忘れている。

三つ子なら似ているのも解る、けど、今日はじめてあった王女である義妹が自分と同じ顔…なんて、怖すぎる。いきなり鏡が出てきたようなイメージ。

ぼーっとしていたエアリーがふとフィオーレの後ろにいた人物に目をやる。

「?! か、母さん?!」

その声にメアリーがはっとする。

フィオーレに付き添っているその女性は、まさに3人の育て親、子供の3人を育てる為、リオンがマラスオと共に場外へ出した元小間使い、ミヨルだった。

とっさに駆け寄るエアリー。

「っ…母さん!!! いったい何してたのよ!!!??」

エアリーがミヨルの両肩を持って揺さぶる。

「申し訳ありません、申し訳ありませんエアリー様メアリー様! 私に近づかないでいただきたいのです!」

エアリーとメアリーはいきなり言われた『近づかないで』と言う言葉に驚く。しかし、納得なんてできるわけがない。

「何言ってるの?!」

「何言ってるのよ?!」

「「母さんっ?!」」

泣きながらミヨルは話した。

「私に近づくと、お2人が汚れてしまう…私は、お2人に会わす顔

がないのです。私の手はもう汚れてしまったから…だから、何も言わずに出て行ってしまったのです。申し訳御座いません!! 何も言わずに消えたこと、お許し下さい……!!」

「……わかんないわよ!! どういふことなの?!!」

「母さん、お願い、説明して。納得できないもの!!」

ミヨルは少し悲しそうな顔をして、ポツリポツリと話し始めた。

ミヨル（後書き）

あるとです。

ミヨル中心になってしまいました…

次はミヨルが消えた理由編です。

あの日の出来事

「私は……人を殺めてしまったのです」

唐突に話し始めるミヨル。

「「?!」」

驚く2人。けれど、驚くのは当然のこと。なんといっても、育ての母が人殺しだと言うのだから。

「詳しく話して」

厳しい目で見るエアリーを一瞬見た後、視線を床に移す。王と王妃、そしてフィオーレがそっと席をはずしたのは王妃の気遣いだっ
た。

「世間の目から逃げるように暮らしていた3年前、ある男が私たちの秘密を握ったのです。」

3人が王家の血を引くことを。私が本当の母親ではないということ。

男は私に会った瞬間に言いました。『反逆者が。いつまでも生きて入れると思うな。国民にはまだ言っていないがな…先にお前に言っておきたかったんだ』と。笑いながら…。私は、ただ3人を守りたかった。だから、それを聴いた瞬間、思わず男を近くにあったレングで殴り殺してしまった。

男は貧困地スラムの者でした。だから、死んでも大事にはならなかった。

私は男を山の中に埋めました。

…けれど、3人のもとに帰ることはできなかった。

汚れた私が帰るなど…到底できなかった…!!」

叫ぶように話すミヨルに、エアリーはとても悲しそうな顔をする。

帰ってきてほしかったのに、と心の中で呟く。

「なぜかそのとき、死ぬしかないと思いました。

だから、思わずそのまま近くの川辺へ行き、身を投げたのです…。

幸か不幸か、そのとき側を通りかかった方がいらっしやいました。

……第2王子、フィアート様です。

フィアート様は魔法で私を助けてくださりました。

そして、話を聞いてくださり、私を城に招いてくださいました。

そこでリオン様と再会し、また城で働くことになったのです。

何回も連絡をしようと思いました。…しかし、できなかった。できるわけがなかった…!!

私はリオン様に3人のことを頼まれたのに…!! 私に約束を守ることができなかった! 側にいることすらできなかった…!!!

泣き叫ぶミヨルの肩をメアリーが静かに抱く。

感謝の念がこもったその動作にミヨルがハッとする。

そして、穏やかな表情になった。

エアリーが、その表情から彼女が救われたことを知ったのは言うまでもない。

あの日の出来事（後書き）

あるとです。

更新、遅くなつてすいません。

昨日、一昨日と体調不良で寝てまして…すいません

チェーロ

「だから、ビアンカ家の初代が初代魔法使いなんです。つまり、私も国を治めようと思えば収められるんですよ」

にやっと笑うチェーロさん。

「一応、貴女達よりきちんとした血統ですよ。初代魔法使いは私の先祖ですから」

それから冗談ですよ、と笑う。

「白髪の子供が不思議な力を持つ、と言うのは初代魔法使いが白髪の子供だったから。噂みたいなものなんです」

短く切った銀に近い白髪が風に小さく揺れる。

「…あの、私って魔力が強いですか？ 全然そんな感じしないんですけど…」

「……魔法の開花時期は人それぞれです。あせらなくていいですよ」
私の頭に大きな手を載せ、優しくなでてくれる。なんとなくお父

さんをイメージしちゃったけど、まだ10代なのに失礼だったかな
…内緒内緒。

「そうだ、明日、エアリー様、メアリー様と一緒に、付騎士に会いに行きましょう。もう一応決まっています。なるべく親しみやすいように年齢の近い者を集めていますので」

「チェーロさん、チェーロさんは誰の騎士なんですか？」

「最初に言いましたが…第一王女、フィオーレ様の付騎士です」

苦笑したように言う。あれ、言われたっけ…

物忘れがヤバイ

「あと、たとえば城に来た時期が遅いと言えど、私達騎士や城の小間使いより貴女方のほうが身分が上。敬語などは使わなくていいんですよ。って言うか使わない方がいいです。他の者が気を使ってしまうので」

困ったように笑って言う。んなこと言われても困る。今まで敬語使ってたチェーロさんにいきなりタメ語？ 無理無理。

そんな私の表情を見ながら、目を細めて言う。

「とりあえず、明日会う人に敬語は使わなくていいですからね。まあ、そのうち慣れますよ」

そして、城の中に入るように私を促した。

チェーロ（後書き）

あるとです。

今回短くなりました。

次、第2王子とか出せたらいいなーなんて。

王子と王女

城に入るとチェーロさんにお風呂に入るように言われた。

素直に入って出てくると、王座の間（王室）から出てきたエアリー、メアリーとぼったり。
…そして、母さんにも。

「…?! 母さん?!!!」

「チャミ様…?!」

母さんを見た瞬間、生きていてほつとするのと同時にむかついてきた。

「何も言わないで出て行くなんて!! 　ふざけないでよ!! 私達がどんなけ心配したと思ってんの?!」

殴りかかりそうになった私はエアリーに止められる。

少し落ち着いた私は母さんの話を聞いた。途中で3回ほど殴りそうになったり蹴りそうになったりしたけどメアリーに羽交い絞めにされてできなかった。

母さんが話し終わってから私達は黙りこくった。1分後くらいに、エアリーが口を開いた。

「でも、生きててよかった。また会えてよかった」

メアリーが頷き、母さんが微笑む。私も頷こうとした瞬間――

[illegible]

「フィア様あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！」
「」

と言う叫び声と共に、地響きのような音も聞こえてくる。

5人の男の人が女の子と男の子を追いかけている。5人の男の人はすごく速いんだけど、男の子と女の子が魔法を使って逃げているからなかなか追いつけない。

母さんの笑顔が固まる。

「フィアート様…ローザ様…」

王子と王女（後書き）

あるとです

結局王子王女出ませんでした…

残念…

王子と王女？

息を切らせて走る女の子を男の子が軽く押す。すると、足は動いていないのにすごい速さで滑っていく女の子。もう少しで私たちのところまで来る。

後ろから追ってくる男の人たち。

その中の1人が急に止まった。

「はっ！！！」

短い掛け声——その瞬間、その人は女の子を抱えていた。

「「「?! 瞬間移動?!」」」

わけが解らない。けれど、彼は実際にココにいる。何で？

「…スー君…」

母さんが呆れたように呟く。

「ローザ姫を抱えるならその抱え方じゃダメでしょ」

「あ、すいません!!」

スー君と呼ばれたその人は女の子を抱えなおす。

：所謂お姫様抱っこをする。

男の子は側に下ろす。すると、すぐに逃げようとする。

「こら。逃げちゃダメなんでしょ？」

とりあえず抱えあげてみたら口を尖らせる。

「ちえー」

11か12くらいだろうか。でも、背は私と同じくらいだから、後ろから抱きしめる感じになっちゃう。

恥ずっ!! でも、男の人たちが大変そうだから放すことはできない。

後から追いついた4人の男の人に男の子を渡す。

「ありがとうございます。パーティーが嫌って、ローザ様とファイア様が逃げてしまって。捕まえるのが大変だったのです」

にっこり笑って私に頭を下げたその人は17くらいに見えた。

追っていた5人のうち1人の男の人が私を見て驚いた。

「あの、もしかして貴女はチアミノ様では…?!」

「あ、はい、そうですが…?」

「では、そちらの御二人は?!」

「エアリーです」

「メアリーです」

「「「「?!?!?!」」」」

いきなり、その5人が片膝について私達に頭を下げた。

「ご無礼を…こちらは第二王子、フィアート様、第二王女のローザ様です」

1人が女の子と男の子を手で示す。

今度は私達が驚く番だった。

「「「?! わ、私達こそ…!! すいません!!」」」

なぜか、私までハモる。

「私はフィアート様の付騎士、レイ・スタジオネと申します。お見知りおきを」

「同じくアツティーヴォヴァといいます。よろしくお願いします」

「私はローザ様の付騎士、ライ・ブジーアと申します」

「同じくジェル・モーリオと申します。お願いします」

「同じくスオーノ・フルミネと言います。よろしくお願いします」

いっぺんに言われたって分かんないってば!!

王子と王女？（後書き）

あるとです。遅くなつてすいません。

ちなみに、年齢はこうです。

レイ↓16歳

アツティー↓13歳

ライ↓18歳

ジェル↓17歳

スオーノ↓14歳

スー君とはスオーノのことです。

ローザ

「ごめんなさい、あの、もう一回言ってもらっていいですか」

名前が全然聞き取れなくって、思わず聞き返す。

律儀に丁寧にゆっくりと言いなおしてくれる。やっさっし!!

「あ、私はエアリー・デュセールと申します」

「私はエアリーデュセールです」

にっこり笑って自己しよ…って、え？

今、デュセールって言った??

「ちょっと待って、エアリー、メアリー、いつの間に『デュセール』
名乗ってんの?!」

デュセールとは王家の名。私達は王家から出ていたから名乗ること
とはできない。

なのに…

「は、はい。すみません…」

「まあ、解らないでもないですが」

探してたんですがその声でわかりました、と話す。

「夜から皆さんの歓迎パーティーを行います。王家の人間との顔合わせ、ならびに家族の親睦っていうか信頼を強めよう、見たいなパーティーですけどね。付騎士との顔合わせは明日ですが」

手に持ったドレスを私に手渡す。

広げてみると……

「チェーロさん、私絶対着ないからね？」

豪華すぎる。

なれない私達には絶対に着れない。

「えー、なんで？ お姉ちゃん絶対似合うよ!？」

驚いて振り向くと、私の服を握って少女——第二王女ローザ様が私を見上げていた。

「ローザ様？」

「チアミノ…だったけ？　じゃあ、チー姉さまだね！！　チー姉さまの髪、綺麗な紫色だから、この青いドレス、絶対似合うよ！！　この宝石も絶対似合う。着なきゃ！！」

にっこり、笑って話すローザ様。かわいい…やばっ本当に可愛らしい！！

「それと！　私は貴女の義妹だから、ローザって呼んでね。姉妹で様付けなんてなんか変でしょう？」

「……わかった」

満足したかのように頷く。そして…

「ジェル、ライ、スー。チー姉さまを私の部屋まで！」

「「「はい！！」」」

え。

ジェルが私を抱え、ライがローザを抱える。

その2人の間にスーが入って2人の腕を取る。

「いくよー!!」

ばしゅん!!

と言うような風の音が聞こえた気がした。

それはスーが私達を持って跳んだからだと気付いたのは、スーの二回目のジャンプの時だった。

(にしても呼び捨てがこんなに難しいなんて知らなかったわよ!!)

ローザ（後書き）

あるとです。

私的にスー君好きです。

脚力が半端ないスー君でした（笑）

番外編 ハッピーバースデー（前書き）

スオーノとローザのほのぼの…のはずです。

本編とはまったく、まったく関係ありません！！

番外編 ハッピーバースデー

「スーウ!!」

「わっ!!!!」

うたた寝をしていた俺は突然の声に驚く。

「ローザ様。どうされました？」

「うん、スーに頼みがあった」

この時間はライが護衛についているはず。彼じゃダメなのかな？

そんな俺にはかまわず、俺の服の袖を引っ張る。

「は、や、く!! 早くしないとパーティー抜け出したことばれちゃう!!」

今、城は国立記念パーティーの真っ最中。街もお祭り騒ぎだ。正直言うと、実際付騎士はパーティーなどなら主の側を離れてはいけない。けれど、会場は城。更に主は第二王女。

一番狙われにくいし、他にも大勢の見張りがいるから、俺達は2時間づつ交代で休みに入った。

で、今はライの番。俺はライの前だったからあと4時間位は休み

「これは…」

国1を誇る大木。国ができたときに植えたとか。

高さは…登れば、おそらく国中を見渡せるほどだろう。

「登って」

「はっ?!」

にこっと笑い、俺に向って手を伸ばす。

「スーなら私をてっぺんまで連れて行くことができるでしょう?」

「ええ、できないこともないですけど……しかし、何でもまた」

「何でもいいから連れてって!!」

「……はい」

姫を抱え、少ししゃがむ。そして脚に力を入れ…跳ぶ。

1番下の枝でもう一度跳びなおす。今度は上のほうの枝。そして
てっぺんにたどり着く。

「「ぶはっ」」

葉っぱの中を通ってきたから髪の毛に葉っぱが絡みつく。

軽く姫の頭を撫でて葉っぱを取る。その瞬間――

「姫――！ ひめえ――？！……！！」

「「げっ、ライ！！」」

姫と顔を見合わせ、笑いあう。

「間一髪！」

「そうですねえー」

姫が笑い、街を見下ろす。

「私ね、一度ここに登ってみたかったの」

「？ なぜですか」

「…国をね、見渡したかったんだ」

「……塔からでも見えるではありませんか」

小さく首を振り、俺に少しもたれかかる。

「後から作った城じゃなくって、ここで見たかったの。国をずっと見てきたこの木の上で。私が生まれたこの国を、ここで見たかったんだ」

「姫…？」

「こんなこと、ライじゃ叶えてくれないでしょ」

時々、姫はとても大人びた表情をする。俺よりも年上に見えると
きがある――

姫は国立記念日で騒ぐ国民を眺めながら、ポツリと呟いた。

「いつか大好きな姉様が治める私の国ここのくにを見たかった。この木でね」

にっこり笑う。

「ねえスー？」

「はい？」

姫は体を俺に預け、俺を見上げる。

「この木ってね、国と同じ誕生日なんだよ！」

何を言い出すのかと思いきや……

「だから、今日は国の誕生日を祝うだけじゃなくて、この木も祝ってあげなきゃね!!」

姫の言いたいことが段々解ってくる。

「…そうですね…そうですね!!」

顔を見合わせて笑いあい、息を目一杯吸い込む。

「誕生日、おめでとう――」

番外編 ハッピーバースデー（後書き）

あるとです！

今回は誕生日の番外編です！

実は今日は私の大切な人の誕生日です！！

だから、一応これはお捧げです（笑）

「こんなところで捧げんなよ！！」

ええ、その通りです。すいません。

でも、読んでくださっている皆さんに知ってもらいたかったんです！！

今日誕生日の大切な人は、今の私を作った人だと思っています。

よき理解者で、何回も彼女に助けられ励まされ…

彼女がいるから私は今こうして楽しく小説を書けているんです！

確かに他にもそんな人はいます。

けれど、彼女が一番大切な人で、親友です。

分かり合える、解ってくれる友達です。

最期にもう一度――

H A P P Y B I R T H D A Y ！！

部屋にて

「広っ！」

ローザの部屋…は、私達と同じくらいの大きさ。でも、私達は3人部屋、ローザは一人部屋。

一人あたりの面積違うね？ 別に支障ないけど。

「つていうかローザ？ 何で私を連れてきたのよ…」

「だーって。チー姉様、このドレス、着ないつもりでしょ」

「うっ」

凶星…

「だって豪華すぎて着にくいんだもん」

「だから着せてあげようと思って」

にっこり笑うな！ かわいいけどその笑顔が逆に怖いから！？

「ミーさん♪」

「はい」

いつの間にかいた一人の女性が、ローザの手渡すドレスを手にする。

「3人は外にいてね。呼んだら入って」

「はっ」

ドアが閉まり、3人が出て行った瞬間――

襲われた。

「?!! やめっ……!! 自分で着るからやめてえええー!」

街娘が城の使用人に着替えさせられる…慣れないことはしないほうがいいっ！……！！

「チー姉様って細っ！！ お姉様並みだよー？ あ、お姉様はフィオ姉様のことだよ」

どうでもいいから助けてっ？！

「ちょ、ローザも見えてないで！！」

「慣れなきゃダメだよー？」

「いやいや、痛いから！！ コルセット締めすぎぃー……！！」

ぐ、苦じ……

「終わりましたよ」

「ぶはっ！！」

死ぬかと思ったああーーーーっ！！！

私を見たローザが一言。

「……すごい…綺麗…」

何言ってるの、ローザちゃん。貴女の方が綺麗でしょ！！
お世辞はいいから！

「スー、ライ、ジェル！ 入ってきて！！」

ドアが開き、入ってきた3人は何故か私から視線をはずす。

何だよ？！！

「…チアミノ様、髪を…結ってもよろしいですか？」

えっと…確かジェル？

「いいけど…あ、チアミノって長いでしょ？
省略していいよ。チーノとかチアとか」

「ありがとうございます。ではチーノ様。失礼します」

ジェルがくしで私の髪を梳く。上のほうでくくっていた髪をいったん下ろし、もう一度あげる。そして少し髪型に工夫。

何やってるのか、こっちはさっぱりだけど。

「ジェルは私の髪もしょっちゅういじってるよね」

「すいません。なんかやつぱり髪の毛を結うの好きなんですよ」

苦笑しながら手は止まらない。

「できました」

「……うわ、すごい綺麗……」

スーが呟く。…エアリーとメアリーに言ってあげてね。

「パーティーまではあと1時間くらいあるけど…せっかくだし、みんなに見せる？ それとも内緒にする？」

ローザがそう言った後、ドアがノックされた。

部屋にて（後書き）

あるとです。

早く騎士団登場させたいです！！

早く出てきて欲しい！！

騎士―ナイト―

「失礼します。パーティーの件ですが…」

現れたのは茶髪の少年。一瞬しか見えなかったけど…
何でかって言うと、目が合った瞬間、目が点になり、顔を真っ赤にして背を向けたから。

「しっ失礼しましたっ!!!!」

ボタン、とドアを閉める。ちょ、なんなのよ、さっきから。

「―「ナイト?」」

騎士3人組が尋ねると、まだドアの向こうにいるらしい少年は小さく答える。

「はい…」

「お前、チーノ様と顔を合わせれないからだろ、逃げんなよ」

「入ってきていいわよ、私が許す」

呆れ声のライと、にっこり笑うローザ。

「ダメです!!」

ドアを開けようとしたスーは、その声に驚く。

「ナイト？」

「俺は王より、チアミノ様とはまだ会うなと言われております。王の命令は絶対です。たとえば、ローザ様がお許しになってくれたとしても俺が俺を許せません」

この子…ナイトだっけ？ ナイトってすごく誠実なんだな…国に王に。なんかびしびし伝わってくるもん。

「あっそ。じゃいいよ。それで、用って？」

ローザ、あっさり…。

「はい、実は、今晚7時からの予定だったパーティーですが、6時から変更なさるそうです」

今は、5時ちょっと前。あと1時間…。

「なんで？」

「…知りません」

「どうせお母様の気まぐれでしょう。あったとしても『夜更かしは健康にも肌にも悪いから』、とかでしょ、どうせ」

「……では、用が住みましたので俺はこれで…」

私は、思わず聞きたくなった

「ねえ、あんた、誰？」

「??」

あっと、質問が悪かったかな？

「ナイト・エリユーと申します。明日付けで貴女様の付騎士となります。よろしくお願いします」

「…年は？」

「14です」

「私と一緒にね」

「光栄です」

「そんなに硬くなくても」

「いえ、貴女様は俺の主になられるので」

「…ナイトの顔見たいな」

「明日まで待ってください」

「…けち」

「王の言いつけです」

それから数分。

私は何を言っても『王』『王』『王』……！

いーいーかげんに…ウザイっ！……！！

「だぁー！ー！ー！ー！っつ！！！！！！！！ あんたは私の付騎士になるんでしょ？！ 言うこと聞けないの？！」

思わずドアを開け放つ。

「だっ！！！！」

外開きのドアを力強くこじ開けると…

「あれ、いない」

「ドアの後ろです！！ 後ろ！！」

ジェルがあわてて叫ぶ。え。

「いたたたた…」

「うわあ？！ ごめんっ！！」

のそのそドアの陰から出てきたのは…

茶色い髪に緑の目を持つ短髪の少年。

これがナイト…

「う、うわああああ?!?!」

私を見たたん、怪物でも見たかのような声を上げる。失礼な!!

「しっ失礼しますっー!!!!!!!!!!」

「あっ! 逃げるなああー!!!!!!!!!!」

「んな無茶な…」

眩きは無視!!

騎士―ナイト―（後書き）

あるとです

なぜこんな出会いに――？！！

あれえ
（汗）

ダンスパーティー…？

午後6時——大広間。

集まったのは…私たち3人に王家の人たち、そしてその付騎士に
軍隊長、騎士長、そのほかいろいろなお偉い様。

そしてなぜか、私の後ろにはチェーロが。

「チーノ?! なんかいつの間にやらかわいくなって!!?」

「おばさん化してるよ、メアリー」

「「いやいやいや、それ言う?」」

「嘘だよー。すごい綺麗!」

対照的な色合いの同じ形をしたドレス。髪は、二人ともアップ。
エアリーは左に髪を流し、メアリーは右に髪を流している。

そして、2人の後ろにいる二人の男性——誰?

「はじめまして。私はフィオーレ様の付騎士、コラッジョ・チーマ
と申します。以後、お見知りおきを」

「同じくジェン・ティーレ。よろしくお願いします」

「ラッジは今日1日私に付いていてくれるみたいなの」

と、メアリー。ラッジ…？ ああ、コラッジヨ…ね。

「ジェンは私についてくれたの」

にっこりとエアリー。

「へえ、あつ、よろしく。私はチアミノ」

「「存じております」」

…なんか、すっごいむずむずする。

「そういえば…フィオーレさ…フィオーレの側に付いてなくてもいいの？」

エアリーがジェンに聞くが、呼び捨てに慣れていない為、詰まる。

「ええ、フィオーレ様の付騎士は5人いるので。フィオーレ様が『心配だから3人に付いていてあげて』と。ですから、私達3人がそれぞれ明日までお守りしよう、と」

なるほど。にしてもジェンっていつも笑ってるから目見えないなあ。

「チーノ!!」

「はいっ!!」

突然聞きなれない声が私の名を呼ぶ。

「何固まってるんだよ」

カツカツと近づいてきたのは：

「「ジョイア様」」

「はじめまして、だな。第一王子、ジョイア・デュセールだ。つと言っても、もう3人とは兄弟なんだから、くっだらねえ敬語とか使うなよー?」

「「は、はい…」」

「だから、それがダメだって言ってるんだよ…特にエアリーとメアリ。2人は義姉だぞ? チーノのは同じ年だから…双子になるのか。…似てねえけど」

「そ、そうで…だね。そっか、同じ年なんだ」

「おい、今…ま、いいや。とにかく、これからよろしくなー」

颯爽と去って行く。

「とってもフレンドリーな王子様だね」

「「ね」」

ジョイアの後ろを付いていく2人の付騎士を眺めて苦笑する。ジョイアよりもおそらく10センチは背の高い2人がジョイアに何か言われて一人は頭をかき、一人は肩を落としている。

毒気でも抜かれてるのかな…

「3人とも、今日は一応ダンスパーティーの予定なんだからパートナー見つけていろんな人と踊ってね。私はもちろん夫とだけど」

いちいちハートマークをつけないで、リオンさん…

そういったらなんか怒られた。

「あら、リオンさん、なんて…貴女達は私の子よ？ お母さんって呼んで」

「でも…なんか、貴女は気軽に呼べそうにないんで…」

「そう：なら気が向いたらでいいわ」

「ごめんなさい」

「そんな硬く：いいのよ、またで。じゃ、楽しんでね」

：ダンスパーティーねえ。周りに豪華な食事が並んで真ん中をあけその中で踊るようになっていいる。王が上座に座り、私達を見下ろしていて、楽団が王の左側で音楽を奏でる。

「一曲、お願いします」

私はチェーロに、エアリーはラッジに、メアリーはジェンにそれぞれ手を引かれ、踊る踊る踊る。

「私、年下趣味じゃないんだけど」

軽く笑うエアリーの声が聞こえた気がしたけど、なれないダンスのせいでそれどころじゃなかった。

「チーノ様、フレンドリーの意味間違ってますよ」
「げっ」

ダンスパーティー…？
(後書き)

あるとです。

早くナイトとか他の騎士も出したいです!!

スイー

「疲れた…」

慣れないものはするもんじゃない。ダンスなんて…ダンスなんて
！！ 一曲踊っただけでギブ！！

「チーノ様？」

休ませてよ誰よなんなのよ？

椅子にへたり込んでた私はよろよろと顔を上げる。

「はじめまして。ジョイア様の付騎士、スイー・ラルゴと申します。
一曲お願いしたかったのですが…体調が優れないのですか？」

「ん、ちょっと疲れて」

まだ踊ってるエアリーとメアリーを見て元気だなーとか呟くと苦
笑するスイー。

優しい目をした青色の髪的青年。にっこり微笑んで隣の椅子に座
っていいか訊く。いいと答えると、嬉しそうに腰を下ろす。

「チーノ様は私のほかに誰とお会いになりましたか」

「そうね…ジョイア、フィアート、ローザ、王と王妃。騎士はスー、ライ、ジェル、ラッジ、チェーロ、ジェン、アッティー、レイ…そのくらいね。あと、ナイトにバッタリ会ったわ」

「他にはフィオーレ様の騎士で、ワイド・バッタリアとカルモ・ヴィータがいます。ジョイア様の付騎士は、俺のほかに1人、ヴォル・ルーメだけです。あとは…貴女方3人の付騎士ですね、代表的な城の騎士は」

私はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「……そういえば、付騎士とかってどうやって決めたりするの??」

「えーっと、そうですね…『騎士』って一言で言ってもいろいろあるんですよ。

城騎士、貴族騎士、国騎士、兵士…兵士だけでも、戦に出る兵士から城を護る兵士、貴族を護る兵士、その他大切な建造物を護る騎士など…

階級的には、下から兵士、国騎士、貴族騎士、城騎士…そんな感じですかね。私達付騎士は城騎士に入ります」

「じゃ、偉いんだ？」

「騎士内で、ですが。兵士はそのままの意味、国騎士は兵士とほとんど変わりません。」

貴族騎士は貴族の付騎士、城騎士は王や王女の付騎士を意味します。結局のところ、貴族騎士も城騎士も付騎士ですよ。

階級は、信頼、戦闘能力などを考慮してその人をどの階級に入れるか、騎士長と軍隊長が決めます。

身分は特に関係ないです。私とかは実際、身分は低いですよ」

「な、なるほど…」

「チーノ様、体調は落ち着かれましたか」

「え、あ、うん」

「では、一曲」

タキシードの青髪のスィー。一礼。その動作、一つ一つがかっこよく見えた。

踊らずに入れないでしょ！！

「喜んで！」

「では…」

一回転。もう一回転。

音楽に合わせて、優雅に。

スィーが誘導してくれる。ああ、上手いな、って思う。
踊りやすいし、解りやすい。

チーロも上手かったけど、それ以上に上手い。踊りなれてる感じ。

「疲れませんか？」

「大丈夫」

逆回転。また逆回転。身体をそらす。また一回転。

あっという間に一曲が終わる。

スイーに礼を言って別れた後、フィオーレと会い、軽く言葉を交わし、別れる。

いろいろな人と踊り、言葉を交わす：そんなことをしてるうちにパーティーは終わった。

スィー（後書き）

あるとです。

うああああ最近文字数多っ!!

読みにくかったらすいませんっ!!!!

部屋にて 一チアミノ一

「「「疲れたあっ！！！」」」」

3人そろっていっせいにベットに突っ伏す。

大きな部屋。美しい調度品。ドレス。バルコニー。やけにフワフワしたベット。

「……お風呂入ってくる」

メアリーが立ち上がり、備え付けのお風呂へと向う。
持って来た着替えを片手に持ち、洗面所のドアを閉める。

エアリーは……もう寝ている。私も寝たいところだけど、とりあえず汗を流したい。

とりあえずクローゼットを開け放つ……すぐ閉めた。

凡人の目にこの豪華さは痛すぎる……！！

A h 悲しきかな貧乏性

スカート状のパジャマ。私のもその形。なのに……なんでこうも違うかね？

寝るだけなのにわざわざここまで豪華にしなくてもよくね？

別にいいよね。寝にくいし。

たとえば『クローゼット内のドレスを着ること』って書かれた紙が
テーブルにおいてあったとしても……！！

うん、そのうち慣れるさ。

こんなのがこれから毎日続くのか……！！

「あがったよー、チーノどうぞー」

お風呂から上がったらしいメアリーが私に声を掛ける。エアリー
に毛布を掛けた後、着替えを持って洗面所へ。

「広い…」

ドアの向こうはきんぴかぴんの洗面所。次のドアの向こうは脱衣
所。その向こうによくお風呂場。綺麗なその場。これがお風呂
だと……？ ありえない。

お風呂に入るだけで気を使いそうになる。

「王族はいつもこんな感じなんだ…」

ああ、身分の違いを思い知らされる…

お湯に浸かって静かに目を閉じる。

これからのこと、王族としての暮らし、新しい家族、騎士、兄弟…

そしてあることに気付く。

私とジョイア、何かが食い違っている…

何が違うのか、解らなかった。

ずっと考えてみたけど、のぼせてきたから考えるのをやめてお風呂から上がった。

部屋にて 一チアミノ一（後書き）

あるとです。

チーノが何かに気付いた!？

でもまだ言いたくないっていうやつです、はい（笑）

騎士と主の対面日

「「「おはようございます」「」」

道ゆく人に挨拶を交わす朝。

向う先は新しい家族が待つ広間。

「「「おはよう」「」」

「よく眠れた？」

「チー姉様っおはようっ！」

「おはよう」

ドアを開けたとたん、みんながいつせいに挨拶をしてくれる。

「「「おはようござ…おはよう」「」」

『『ごございます』と言おうとしたとたん、王様の微妙にきつい視線が刺さる。痛っ？』

豪華な食事の後、みんなと別れ、私達3人は部屋に戻る。

扉を開ける…と…

「今日から貴女方の付騎士となります、7人です」

チエーロが待っていた。

チエーロと、7人の男の人たち。

「チアミノ様付騎士、ナイト・エリユーと申します」

「同じくラーゴ・ベツロと申します」

「同じくバド・ソーニョと申します」

「エアリー様付騎士、レイク・フオーコと申します」

「同じくネロラ・ブイオと申します」

「メアリー様付騎士、マーレ・ベツロと申します」

「同じくヴェント・ルーチェと申します」

茶、水、緑、オレンジ、黒、青、黄の髪。綺麗なさまざま髪色。

「あ、よ、よろしくおね…よろしく」

「「よ、よろしくね」」

おどおどと挨拶。

それら全てを優しく見つめるチェーロ。お前は保護者か！ と突っ込みたくもなるけど、とりあえず我慢。

「では、少し皆さんで親睦を深めては？ 私は主の下に戻りますので」

「「は、はあ…」」

ボタンと、扉が閉まってから約10分――

私達は、めっちゃくちゃ仲良くなっていた。

「ラーゴとマールは兄弟なんだ？」

「ええ、まあ」

「よく見たら似てるー」

「よく見なくても似てるって」

「そうですか？」

「え、レイクってばチェーロが怖いのか？」

「怖くないです、ニガテなだけです」

「気の強そうな顔してるのに」

「見かけだけですよー」

「ナイト…！」

「いやー、ヴェンってちっちゃいねー」

「やめてください…」

「こいつ、『ちっちゃい』が禁句なんです」

「150センチですいませんね…！」

「え、16歳で150はやばくない？」

「wwwwww言わないで下さい」

「「「かわいいー」」」

「おちよくってないですか?!」

「「「もちろん」」」

あほな会話をしばらくした後、私はナイト、ラーゴ、バドを連れて中庭へ。

エアリーとメアリーは、レイク、ネロラ、マーレ、ヴェン（ヴェント）と城探検（？）に。

くそう、私も後で行こう…

騎士と主の対面日（後書き）

あるとです。

ようやく付騎士登場！ おっしやあ！！

報告…サイト始めました

特訓？

「…強いすよねえ…」

互いに剣を持ち、戦い始めて3分後。

ナイトの剣が地面に突き刺さり、彼は方膝を付き、頭を下げる。

「参りました」

「……本当に？」

嘘でしょ。私が勝っちゃうわけ？

「じゃ、次は俺とやりましょう」

ラーゴが私に剣を向ける。

しばらくして、私は思った。

私って、意外と強い？

ちょっと調子に乗ってみよう。なんか乗りたい気分だから。

「バドも一緒にかかってきて」

ラーゴの剣を交わしながら、バドを挑発。

「…いいんですか？」

ナイトが心配そうに聞く。

「バドは3人の中で1番強いですよ」

マジか。

「まあ、こういうほうが特訓になるでしょ」

「特訓って言うか組み手？」

つつ込まないで、ラーゴ…。

「怪我しても知りませんよ？」

「やってみなきゃわかんないって」

数分後

「勝った…勝っちゃった…」

結局ナイトも入っての3対1。にもかかわらず…勝ってしまった。

「チーノ様に護衛は必要ないですね」

「え、いやいや、護衛くらいやってよ」

「」「やりますって」「」

「つていうか、もういいでしょ？ 城探検したいなー」

にっこりお願い。

「「…お供します」」

「やたっ」

うーん…私って性悪？

違う違う、違うよねー？

特訓？（後書き）

あるとです。

ああ、もっと騎士団出したいのに…!!

風になれ

私達が城に来て、1ヶ月がたった。

「チーノ様、おはようございます」

「…ZZZ」

「…フツ」

「うぎゃああ?!?!」

ぐっすり眠っていた私は、ラーゴによって起こされた。

「おはようございます」

「ラーゴ、耳に息搔けるのはやめて?!」

「起きないのが悪いんですよ」

マーレの弟というだけあって、口だけは達者。性質が悪い。

「おはようございます。…今日はこのドレスでいにかかですか?」

後から入ってきたナイトが、水色のドレスを出す。

「却下」

「……これですか？」

ナイトが出したのは、少し短めの黒いワンピースっぽいヤツに緑と白の中着、青いズボン。

「うん、そっちの方がいい」

大きくため息をつくナイト。ごめんね、やっぱドレス慣れない。もう一ヶ月もたっているのに。

ナイトとラーゴを追い出し、小間使いの人が手伝おうとするのを断って着替える。

「エアリーとメアリーは？」

外で待つ2人のもとに行き、聞く。

「1時間くらい前にマーレ達を連れて日課の散歩へ出かけました」

「…また庭を？」

「いいえ、空中散歩に」

2人の魔法は自然魔法。エアリーは風魔法。メアリーは水魔法。そして2人で成長魔法を使う。

昔は1人で魔法を使うことができなかった2人も、3年位前から魔力が強くなったらしく、個人で魔法を使っている。

今回は、エアリーの魔法で空中散歩というわけだ。

「おっはよう！ チーノ！！」

頭上からの声に驚いて見上げると…

「おはよう！ エアリー、メアリー」

風に包まれ、ふわりと跳ぶ2人とその付騎士。絶叫系がニガテなネロラ以外はもう慣れっこのようで、付騎士の3人はなかなか楽しんでる。

「チーノもおいで」

エアリーが風を操り、私の体が浮く。

「まだ6人までしかできないの。なかなか難しくって。チカラの消費も結構だしね」

エアリーのこの散歩(?)はチカラの修行でもあるらしい。

「気持ちいいよね」

メアリーがにつこり笑う。

マレーが呟く。

「風になったみたいですよね」

風になれ（後書き）

あるとです。

番外編みたく新章突入！

ほのぼの好きですよーでも書きにくいんですよー

文章力ないって大変ですよー

カルモ

「チーノ様？」

朝食後、日課の特訓をしていたとき。

不意に近づいた彼を斬りかける。

「うわぁ?!」

「ごっごめんっ!!!」

彼の名はカルモ・ヴィータ。15歳。フィオーレの付騎士。

「何するんですかー。斬らんといてくださいよ！ よけんのもって難しいんですよ？ 知ってると思いますけど」

田舎から王都に来たという彼。方言でなまっている。

「ごめんね。何か用？」

「いや、俺はないんですけど主が。部屋まで来てくれ言っとんどすけど」

「あ、そうなの？ ん、ありがと。すぐ行く」

「はい、俺の役目は終わりです。じゃあ、しっかり伝えましたよー」

帰り様、ナイトと軽く話す。

「今日って見張り休みなん？」

「ん。今日はバドとラーゴ」

「お、俺も休みやねんかー、ちょっと見せたいもんあんねん。ちよ
うどええわ。部屋でなー」

「おーさっさと帰れ。俺はまだ役目があるんだよ」

「そか。ほな。俺は帰るわ。あー昼寝したっ」

カルモの話し方はなんかかわいくて私は好き。

カルモのほかに、ヴォルも方言だけど、カルモのほうがなまりが
強い。

カルモと話してたら、こっちまでなまりかける。でもかわいい。

茶色のくせつけのある髪。赤い目。緑の少し大きめの服。そして
気ままな性格。かわいいなあもう！

なーんてほざいてたら…

「そうですか…」

なんかナイトがしよげた。なんで？

「ナイトー」

ニヤニヤとラーゴがナイトをつつく。

バドは呆れてみている。ナイトは赤くなる。私は意味が解らない。

「どういう意味よー？」

「いえー？ 何でもー」

「……」

「ラーゴやめろおー！ー！！」

…うん、今日も平和だ。

カルモ（後書き）

あるとです。

カルモとヴォルは関西弁です。

カルモとナイトは騎士塔（家みたいなところ）の部屋が同じです。

仲良しですから！

番外編 おやすみなさい

ゴロゴロピッシャーーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

雷の音に驚くチアミノ。夜、雨、雷。しかし、エアリー、メアリ
ーはいない。

こんな日に限って、城外に行っている。

「なんで2人ともいないのー?!」

雷。それは広い部屋に一人でいてるとき、一番聞きたくないもの。

「う…もうやだあ…」

外に出て、廊下にいたバドに聞く。

「騎士塔に行っちゃダメ？」

数分後、チアミノは騎士塔にいた。

「あの、すいません、ここで寝るんですか」

「…ダメ？」

この部屋は、ナイトとカルモの部屋。9階建て、地下有りの騎士塔の4階の2部屋のうちの1部屋。

「俺はええですよーでも、ほんまにええんですか？　こんな男になかにおって」

「だって雷怖いんだもん！！！」

ピッシャーーンッ！！！！

「きゃああ？！！！！」

近くにいたナイトに抱きつく。

顔を赤くするナイト。ニヤニヤするカルモ。

ナイトが軽くチアミノを好いていることは、騎士団のほとんどが知っている。わかりやすい。だからこそからかいたくなる。

「…チアミノ様、ここでええなら泊まって下さい。今日は俺、見張り番とちゃいますけど、ハンモックで寝んの好きなんでハンモックで寝ます。俺のベットで寝てください、よかったら」

「…ありがとう、カルモ」

「…チアミノ様のためなら」

「ありがとう、ナイト」

自分より10センチ高いナイトをチアミノは抱きしめる。

真っ赤になって顔をそむける。気にせずハンモックをつるしだすカルモ。

「寝るまで近くにいてくれる？」

ナイトを少し見上げ、聞く。エアリーやメアリーより劣るといえど、やっぱり顔は並以上。ナイトでなくても頼られればうなずかないわけではない。

「もちろんです」

カルモは気をきかせたのか、ハンモックに入り、背を向ける。

ナイトはチアミノが眠りにつくまで手を握り続けた。雷が鳴るたびに怖がるチアミノに声を掛け続けた。

カルモは：兄と妹か、と心の中でつつ込みつつ、すぐに眠りに落ちた。

チアミノが眠ってから30分後、そっと手を離し、ナイトはベットの横に座り込んだ。

毛布に包まり、ベットにもたれ、チアミノの寝息を聞きつつ、ナイトも眠りについた。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはようございますー、よう眠れましたか？」

「うん、ごめんね、無理言つて」

「いえいえ、主の頼みですから」

「いつ起きたの？」

「一時間前です」

「早いんだ？」

「いつものことですよ。日常です」

「あ、そうなんだ」

「ええ、気にしないで下さい（ほんとは起きるの今のはずだけど）」

番外編 おやすみなさい（後書き）

あるとです。

主を思って嘘ついています!!

気を使わせないために気を使っています!!

ナイト君、初々しいねえ（笑）

「ちょ、泣かなくてもいいじゃない!!」

「だって、私チーちゃんと話す機会ってあんまりないし…街も行きたいし…」

「~~~~~わかったよっ!!」

!! 国一の美女がああーっ!!っ!!!! 美貌は凶器だあっ!

「私の部屋来て」

「…似合うじゃん」

「本当?」

ドレスで行ったらさすがにね。私はドレス嫌いだから、私のクロ―ゼットの中はほとんど私服。

その中で、男の子っぽいのを選んでフィオに着せる。

長い髪をくくって帽子の中に押し込み、少しだけ髪を見せる。…うん、どっからどう見ても…王女には見えない!!!

「よし、O K。んじゃあ、騎士は…」

「？ 全員連れてっちゃダメなの？」

「ばれるって。ま、1人ずつ近くにおいて、離れたところから1人ずつ来てもらう？」

「うん」

「じゃあ、ナイトとカルモと一緒に行ってもらおう？ 年も近いし、ダブルデートみたいな雰囲気だしときゃばれないし」

「そっか！ なるほど」

「後ろからはラーゴとチェーロでいいでしょ」

「そうだね。あ、そういやなんでカルモなの？ ラッジでも…」

「いやいや、ナイトとラッジ仲悪いし」

「そうなの？」

…気付けよ

「ま、こんな感じでいいか」

私も髪を帽子の中につつまむ。

選んだ4人の騎士を部屋に呼び、ついて来てくれるように頼む。

「もちろん、私達についてまいりますとも」

「よし、じゃ、行こー!!」

「…どうやって城出るの？」

「もちろん…」

ちらっ、とチェーロを見る

「…あの…？」

「自然に頼んで、何とかなる？」

「…手助けくらいなら…」

「はい、決まり」

「わぁ!! チェーロありがとう!!」

…フィオ、感激。

…チエー口、溜息。

わがまま（後書き）

あるとです。

更新遅くなってすいません！！！！

そして明日からテスト発表です…しばらく更新出来ません…すいません…！！

3花騎士番外編『騎士団』書き出しました。よければどうぞ。

今回、フィオがチーノをチーちゃんと呼んでいることと彼女がちよっと天然（ってか鈍感？）なことが判明（笑）

街にて

「…城を抜け出したの、いつぶりかな」

「え？ 前も抜け出したの？」

「城にばっかいてたくないし、たまに国のことを見なきゃね？」

フィオも王位継承者なのだ。少しずつ、少しずつ意識しているみたいだった。

ここは城下町を走る馬車の中。何人か一緒に乗っている人がいるけど、みんな口々に話してるからこんなことを話していても平気だった。

「あ、そうそう、カルモ、ナイト？」

「「はい」」

「馬車から降りたら、敬語なし」

「え、無理です」

「だーめ！！ 怪しまれるでしょ」

「でも…」

「今日一日、ナイトは私の彼氏。カルモはフィオの彼氏。OK? フィオのことはフィオーレじゃなくてフィオって呼ぶの。私のことはチアミノじゃなくてチーノ。了解?」

「「ら、らじゃあー」」

「よし」

「あ、ここで降りよう?」

「ん。じゃ、よろしくね、2人とも」

馬車から降り、少し歩く。

「あ、この店はいっていい?」

「いいよ。はいうう」

「なんか買うん?」

「あんまり高いのはやめてくだ…やめてくれよ? お金あんま俺持
つてないから」

上手い上手い。頑張れ!!

「このアクセサリーかわいい」

「宝石以外もいいでしょ？」

「ウッドビーズ？ 俺、そんなら作れるぞ」

「ほんとに？！ やった、ナイト、また作ってよ」

「いいで…いいよ」

「私もー！！」

はしゃぐフィオに笑いかけるナイト。

「なあなあ、見てみてー！！」

カルモが持ってきたのは…

「ゴム？」

髪を結うゴム。すごく、綺麗。

「おそろいで持ったら？ いいんちゃう？ 似合いそうやし」

「わ、かわいい！！」

「…よく見つけたねえ」

「色違いでとかどう？ 俺買ったるで？」

「ほんとに？！ ありがとう！！」

私達の後で出てきたカルモは、私達に小さな小包を渡す。

「今日の記念になれば」

「「ありがとう」」

「今はつけられないだろう？ 腕にでもつけたら？」

「あ、そうだね。ナイスアイデア、ナイト!!」

私達が腕にゴムをつけてすぐのことだった。

「きゃあーーーーー!!!!!!」

すぐ近くで、悲鳴が聞こえた。

街にて（後書き）

あるとです。

お久しぶりです。生きてます。テスト終わって燃え尽きたり他のことやってました…うわあああすいませんっ！！！！

ほんととは昨日するはずでした…

頑張ります（泣）

もう一人の自分

悲鳴。

そう思った瞬間、反射的に顔は悲鳴のしたほうへ。

「どけっ!!」

見えたのは、走り去る黒い影と、倒れている女性。

その腹部に見えた光る凶器。あたりを染める真つ赤な液体。

「！！！！」

後ろでチェーロとラーゴが走り出した気配を感じる。

その途端――記憶が途切れた。

突如走り出したチアミノをナイトたちは追いかけていた。

「チーノ様……いたい何が……」

状況がつかめないナイトたち3人。

「でも、あの男は許せやんな」

ナイトとフィオーレの前を走るカルモが呟く。あの男とは、女性を刺し、金品を奪って逃げていった男のことである。

「…チーちゃんが、チーちゃんじゃないように見えた」

「俺も、そう思いました」

呟いたフィオーレに同意するナイト。思っていたことは皆同じだった。あれは、チアミノではなかった。

「はやつ…」

チアミノはものすごいスピードで走っていったようで、なかなか3人は追いつけなかった。

と同時に、あの男の足の速さにも感心する。あの速さのチアミノがいまだに追いついていないのだから。

いきなり、3人の前を走っていたチェーロとラーゴが足を止めた。

「「「?!!!」」」

啞然としている2人の後ろからのぞいた3人は絶句した。

多くの野次馬がいた。その人々は、中央を綺麗に空け、中にいる2人の男女を見つめる。

「チーノ様…」

5人が見たのは、腕を締め上げられた男が地面に押し付けられ、説教と言うか…何かをチアミノに言われているところだった。

チアミノががぶった黒い帽子からこぼれた髪。それは当然紫色の
はずで。

けれど…

「白？」

帽子からこぼれた髪は、^{それ}陽に透けて光り輝く、純白だった。

もう一人の自分（後書き）

あるとです。

あれ、もっと進むはずだったのに。

「…ナイト」

「はっはい!!」

前からやって来たチアミノ。突然呼ばれ、驚くナイト。

「私、何やってたっけ」

「「は？」」

…髪色が変わったときの記憶がまったく無いと言う。

確かに、今の髪色は紫である。

「ねえ、私何やってたの」

「えーっと、俺らもわかんなくて」

「…なんとなく感じましたけどね」

「…! カルモも気付いたの?」

「え?」

カルモとフィオは気付いたことがあるのにナイトは無い。…なん

だかかわいそうになってくる。

「多分…あのときのチーちゃんはチーちゃんじゃなくて…」

「チーノ様はチーノ様の中にもう一人の別人格があって…」

「おそらくまったくの別人よ」

「その人のめぼしがつきそうです」

「「えー?!」」

「ま、今は考えてももしかしたら、だし、確定はできないんだからこの件は置いときましょう」

「そうですよ、今はせっかく街に来たんやから楽しまなあかんですよ!」

「「はあ…」」

納得のいかなさそうな2人。無理に押しとどめるカルモとフィオ。

「城に帰ってからでいいじゃない。実際、チーちゃんがあの状態にならなきゃ確かめれないんだし」

チアミノではない誰か（後書き）

あるとです。

チーノ、別人格発覚。

さつさと次に行きたいんですけど…。

お買い物を楽しみましょう

「これ食べたい」

「買ってくるな？」

ほのぼの。ほんとうにほのぼの。さっきのことが嘘みたい。

「おいしい、これ、なんていうやつなの？」

「さあ：（汗）クレープですかね」

「クレープ：ふふっ、おいしい」

手渡されたクレープを一口。

「あ、ほんとだ」

「ねっねっ？」

甘くてでも苺が少しすっぱくて。おいしい。さっきのことも、だんだんと気にならなくなっていく。

「あ、あの店とかどう？ 可愛くない？」

見つけた小さな店。かわいらしい雑貨屋さん。

「ああ、いいよ。入る？」

「入るー！」

そこでペン2本と小さなガラスの置物を買う。

「おそろいだね」

「ね」

ガラスのおきものを互いに見せ合い笑いあう。楽しい。こんな時が、ずっと続けばいいのに。

そのとき、私はナイトとカルモに、お礼として何かあげようと思った。

「あ、これいい」

一目ぼれ？ 目に留まった2つの置物。思わずレジへ持って行って買う。

「ナイト、カルモ、今日はありがとね」

小包に入れたそれを手渡す。

「あ…ありがとうございます」

「え、ほんまに？ ありがとうございますっ！！」

喜ぶ2人の顔。見ていたらこっちまで嬉しくなっちゃう。

「あ、あっちも見よう？」

4人で移動していた時だった。

「あ、すみません」

人ごみを歩いてるからか。一人の男性と肩がぶつかるフィオ。

「いえいえ。：お」

「「「？」」」」

「なあ、この子ら可愛くない？」

その男性の連れなのか。後ろにいたもう一人の男性に聞く。

「っ…可愛いなあ」

「なあ、俺とあそばねえ？」

あー、あれだ。俗に言うナンパ？

「すみません、このこら俺らの連れなんですけど」
ナイトが私達と2人の間に入ってくれる。

「え、なんだよそれ」

「なあ、お嬢ちゃんたちも俺らと遊びたいよな？」

「え、いや、それはちよつと…無理。ってか嫌」

思わず本音が出ちゃった。しまったあ…

「は？ お子様だなあ。俺らのが楽しいって」

男がフィオの手をつかむ。

「っ！ やめてください！」

「いいじゃん、別に」

そのとき、ナイトが男の手をつかんだ。

「なんだよ？」

「やめてっっていつてるだろ、離せ」

「…は？」

「お前何言ってるんだ、俺らに勝てると思ってんのか」

確かに、身長差は20センチ以上あるだろう。けれど、ナイトは引かなかった。

「…離せって言ってるんだろ？ 意味わかんねえの？」

「わかるぜ、そんくらいな」

「わかってても離さないのか、嫌がってるのに。…お前等、人間腐ってんぞ」

ナイトの一言で、男がキレた。

「っ…なんだと!!!？」

ナイトの胸倉を掴もうとした男の手を止めたのは、カルモだった。

「まあまあ、こんなところで喧嘩したら周りの人にも迷惑かかんで、あっちの路地でも行かん？ そしたら好きに喧嘩できんで」

カルモの言葉に、男達とナイトが路地に向う。

路地についてすぐ、男の1人がカルモに言う。

「…おい、その茶髪」

「両方茶髪やで？」

「お前のことだ」

「俺？」

「そうだ。お前…田舎モンか？」

「ん、そうやけど」

「やっぱりな」

「……なんやねん」

「ふっ…田舎モンが何でこんな王都にいるんだ？」

「いたら悪いんか？」

「悪いね」

「差別やろ、それ」

「田舎モンだから仕方ねえよ」

「……なんやと？」

「田舎モンは格下だからな」

この言葉で、ふと、路地の空気が重くなった。

お買い物を楽しみましょう（後書き）

あるとです。

カルモ、ブチ切れ寸前。

次話、カルモ、キレます。

田舎モン

「田舎モンは格下だからな」

…は？

むかつく。

言い返そうとした私は反射的に口を閉じ、カルモを見る。

静かに、静かに怒っている。空気が、いっぺんに重くなる。

「なんやと…お前…」

「だから、田舎モンは格下。損だよなあ」

暗く、深く怒るカルモ。ナイトが後ずさりを始める。

「田舎モンは言葉も違う」

「それがどうした」

「それに王都からだいぶ離れてるだろ？ いろいろ遅れてるしよお

？ 農業しか脳無い、みたいな？」

「……」

「それに、極めつけはあれだ」

「？」

「国境に近い」

「…なんだよ」

「侵略されやすいんだよ」

「…！」

「つまり、王都に住む俺らの盾っての？」

「…取り消せ」

「本当のことだろ？」

「…取り消せ」

「しかも、あれだ、あの村」

「…それ以上言うな」

「何年か前に滅びた村だよ」

「言うなって言ってるだろ…」

「侵略に來た隣国に滅ぼされた！ その国の目的は王都。しかし、その村が盾になった。だから王都は助かった！」

「何が言いたいんだ？！」

「…お前等田舎モンは結局俺らの盾なんだよ！ 捨て駒！ その村が
いい例だ…！」

その瞬間、カルモは男の胸倉を掴んでいた。

「なんだよ？」

「取り消せ」

「は？ お前、俺に勝てると思ってるのか？…！ お前そんな
ちっちゃい身体で…？ 俺は騎士団の最終選考まで残った男だぞ？
！ あの騎士団の…！ 田舎モンでもそのくらいわかるだろ？…！
強い奴しか残れない騎士団！ それに俺は…」

男は、その先を言うことができなかった。

一瞬にしてカルモに後ろ^{バック}を取られる。

「っ？！」

「一瞬で…」

「?!」

「楽にしてやるよ」

田舎モン（後書き）

あるとです。

カルモがキレイましたー！

怒り 故郷 過去

いつものカルモじゃなかった。

風は吹いてない。その筈なのに、カルモの回りにだけ風が吹く。
カルモの服がはためく。

その風が、カルモの怒りだと知る。

「ぐっ」

男の小さな悲鳴に我にかえると…

ドサ、という音と共に、男が倒れる。

「……」

無表情に、冷徹に男を見下ろすカルモ。

「田舎モンは弱いとおもっとるんか？ 農業しか脳ないて？ …お前、アホやろ。何が騎士団最終選考まで残った、や。今、お前は見下しとった田舎モンに負けたんやで？ 聞こえとるんやろ？」

「ぐっ…」

かすかに漏れる声。もう一人の男は顔が引きつっている。どうやらカルモの強さに驚いたようだ。

私はカルモのことをナイトに聞いてみることにした。

「ナイト？」

「はい」

「カルモって、ナイトより強いのか？」

「はい、だいぶ。戦っても、カルモは軽く俺の剣を流します。おそらく、騎士団の中では5番以内には必ず入っていますよ。本気を出せば、1、2位を争うかもしれません」

いつもおちやらけた感のするカルモが？ 信じらんない。

「カルモと私、どっちか強い？」

「カルモです」

…即答。

「ナイトはあの男、倒せる？」

「倒せますよ。でも…あんなに早く倒すことは不可能です」

「相手、強いのか？」

「まあ、並以上はあるでしょうね」

弱っちく見えたけど…意外と強いんだ？ あの男。

「カルモがここまで怒るの、久しぶりに見たわ」

フィオの弦きがふと耳に入る。

「フィオ、フィオはカルモが怒っている理由に心当たり、ない？」

「…故郷」

「…え？」

「故郷を馬鹿にされて、怒ったんだと思う」

「故郷？ カルモの故郷って…」

「……」

「フィオ？」

いきなり黙り込んで、フィオは下を向いた。

「…ですよ」

カルモをじっと見つめていたナイトが、小さく言った。

「男が言ってた、隣国に滅ぼされた村がカルモの故郷ですよ」

何かが崩れた気がした。

怒り 故郷 過去（後書き）

あるとです。

カルモの過去については、また書きますが、一応別作『騎士団』に書いてます。

滅びた村

「忘れ去られた、小さな村…それが、カルモの故郷です」

続けて言うナイトの声。聞こえなかった、私には。

悲しい。悲しすぎる。いつもの笑顔のそこにあるその深い悲しみ。
男達^{やつら}はそれを…その悲しみをひっぱりだし、笑った。

カルモが怒るのは当たり前だ。怒らなきゃ、おかしい。私でさえ、
今、走り出しそうになる。

「たっ、助けてくれ!!」

もう一人の男が叫ぶ。

「助けてくれ、か。…その滅ぼされた村は、そんな声、誰も聞いて
くれへんかってんで？ 自分で戦うしかなかった。それが唯一の生
きる道やった」

小さな呟きと共に、男を一瞬で倒す。

「……カルモ？ 大丈夫…？」

ゆっくり声をかけるフィオ。カルモに近づこうとした彼女は途中で足を止める。

「…許さん…」

「「「っ?!!!」」」

おぞましいほどの怒り。はっきりに言って、怖かった。

「こんなんで許すわけが無い。俺は、村のみんなの思い背負ってんねん…」

力なく倒れている男の一人を軽々持ち上げ、無抵抗のそいつを…殴った。

「か、カルモっ?!!!!!」

何回も、何回も、何回も。

「もうやめてっ?!」

やめれるわけが無い。わかってる。でも、もう相手は無抵抗なんだから。これ以上は、やめて欲しかった。

「許さん…俺らの命を馬鹿にしゃがって…!!!」

カルモは、私達の声を聞いてなかった。いや、聞こえていなかった。もう、奴等しか見ていない。

泣いて、仲間を思って泣いて、泣きながら奴等を殴って怒っていた。

「許さん、許さん、許さん!!!」

もう、止められない…!!

そう思った瞬間、私の中で、何かが目覚め……

また、意識が途絶えた。

滅びた村（後書き）

あるとです。

カルモ君、暴走中。

次回、チーノ、暴走予定。

狂気（前書き）

チアミノ、キャラ崩壊中。

狂気

突如、チアミノの周りの空気が黒くなる。

「「っ?!!!」」

カルモは、気付かない。気付けない。周りが見えてなかったから。

「許さん、許さん、許さんっ!!!!」

繰り返し、繰り返し殴るだけ。そんな彼に、チアミノがそつと近づいていく。

「壊レチャエバイインダ」

「っ!!!!」

ナイトがカルモの手を掴んで引っ張る。間一髪、チアミノの手がカルモのいた場所の空気を裂く。

「……!!」

正気を取り戻したカルモが、小さく呟く。

「悪魔…」

チアミノのかぶっていた帽子が彼女の『気』に飛ばされる。

中から現れた長い髪は…黒かった。漆黒の髪。目すらも、黒く、不気味な光を放つ。

さっき見た『別人』とは違う人。恐ろしいほどのオーラ。

「チーノ…様…?」

チアミノは、もう聞いてなかった。3人はチアミノの視界に入っ
てなかった。彼女は2人の男だけを見ていた。

「皆皆壊レチャエバイインダ。壊レレバイインダ。イナクナレバイ
インダ」

声は、チアミノのものだった。しかし、その言動はすでに彼女の
ものではない。

殴る殴る殴る殴る殴る

そして、手を振り上げ、すぐに手を振り下ろす。

狂気（後書き）

あるとです。

次話、グロくなったらすいません。

一時封印

「サテト。ソロソロ遊び疲レタシ壊シチャオウカナ」

にっこり微笑んでチアミノは手を静かに挙げる。

「バイバイ」

手が振り下ろされる寸前、ナイトはチアミノの手を掴んだ。

「チーノ様っ！！ 何するんですかっ?!?!」

首を少しナイトの方に向け、恐ろしいほどの笑みを浮かべる。

「邪魔シナイデネ？ 壊シチャウヨ？ 殺シチャウヨ？」

ナイトはひるまなかつた。どこから取り出した短刀でチアミノの首筋を一発。見事なほど美しいみね打ち。

チアミノの体の力が向け、倒れる。彼女を支えたナイトは、その
氣に一瞬氣圧される。

「何だよ、何なんだ、この氣…」

ナイトは怖かった。その気が。そしてナイトは今のチアミノの外見を見て、勘付いていた。この『別人』が誰なのか。

「ナイト、離れて」

突然のフィオの声に、ナイトはチアミノをその場にゆっくり下ろし、急いで離れた。

と、同時にチアミノが光のドームに包まれる。

「チーちゃんの気を抑えるわ。今、チェーロに頼んで封印のビンを作ってもらってるの」

その言葉と同時に、チェーロが路地に入ってくる。

「フィオ様!!」

渡された小瓶をドームの中にそっと置く。すると、チアミノの体から一気に出てくる黒い気。

それをフィオが力でビンの中に入れていく。

「くっ…っ、強いね」

そんなことを言いつつも、ビンの中に気を全て入れ、ビンに蓋をする。

ドームが消えると、チアミノの髪色も元に戻る。

「そのビン、大丈夫なんですか」

「まあね。正統な魔力を継ぐチェーロが作った封印ビンよ？ 一時的ではあるけど、壊れることは無いでしょう。きちんと封印しなおさなきゃ」

「さっきの力は？」

「王家に伝わる力よ。魔力封印の力」

魔力封印、といっても、王家に伝わる封印の力は、ある特定の人物にしか使えない。

その人物とは――

魔王の愛娘、メデュー。

一時封印（後書き）

あるとです。

魔王の娘の名前とかWW

無理です。もう、『メデューサ』からとって『メデュー』でいいや。なんて。

安直うー！！

メデュー×アレン

メデュー

魔王の愛娘。

黒髪に黒い目を持つ。

高い声は怖くなるほどによく響く。

魔力が強く、手刀で物を切ることが可能。

700年ほど前、勇者、アレンによって封印される。

その後、神殿に封じ込められていた。

アレン

勇者。

初代魔法使い。

神に愛されし乙女。

美しい白髪、水色の目を持つ。

正義感が強く、剣の腕もなかなかのもの。素手でも戦える。

700年ほど前、人々を苦しめていた魔王の娘を封印。

その直後、18歳の若さで死ぬ。

* * * * *

「……で？」

「うん、だからね。チーちゃんの中には、そのメデューとアレン様がいるかも☆」

いるかも☆じゃないよ…

嘘でしょ？

ありえんの？

勇者と魔王の娘の共存なんて。

「ありえるかも」

……

「ほんとに？」

「だって私が言うんだから」

何その自信。

「たぶんね。もしかしたら」

「でもなんで今まで出てこなかったの？」

「……チーちゃん、この前神殿行ったでしょ」

「？ うん。エアリーとメアリーと」

「そのときについてきたんじゃない？」

「なんで?! 何で私?!」

「魔力が強いからでしょ」

「
……
」

脱力。

え、何、つまりアレン様とメデューと一緒に私の中に住んでるの？

メデュー×アレン（後書き）

あるとです

うぎゃあああああ

更新遅くてすいませんっ！！！

地下

アレン様とメデュー…ねえ

自分はそのときの記憶が無いから全然わかんないんだけど。実感ないし。

「エアリー…」

「何？」

じーっとエアリーの顔を眺めてたら怪訝そうな顔で見られる。

「エアリーは魔力の強さとかわかる？」

「なんとなくはね」

「私は？」

「……私達なんか足元にも及ばないわ」

……つまり、私の中にいるっていう2人はこの魔力に魅せられたと。

めんどくさいなもう。

だっていつ2人が出てくるかわかんないし、対処法もわかんない。
どうすればいいのよ。

不安だし、怖い。けど、向かい合わなきゃいけない気がするのも
確か。

ぼーっとベットに寝転んでそんなことを考えていたらノックの音。

「はい？」

エアリーの声にドアが開く

「チーノ様？」

バドだ。

「失礼します」

この声は…

「ジェン？」

フィオの付騎士、ジェン・テイレ（19）の声。

「はい、突然、申し訳ございません」

「いいけど…どうしたの、珍しい」

「いえ、フィオ様がお呼びです」

……わざわざ貴方が来なくてもいいでしょう。

「わかった。行くよ。どこに行けばいいの？」

「地下2階の奥の部屋に」

待って待って、地下ですでにわかんない。

「この場所はフィオ様と王と王妃様、そしてそのお3方の付騎士しか知りませんので」

ジェンが来た理由がよく分かりました。

「ナイトとラーゴも後できます。ワイドが連れてくると思います」

ワイド…ああ、あの身長148cm16歳のワイド・バッタリアね。

付騎士多すぎてあんまり会わないからわかんなくなっちゃうなー

「参りましょう？」

ジェンに促され、大人しく付いて行く。

地下（後書き）

あるとです。

遅くなってすみません！！

夏でバテてました。やる気が起こらなくて…文章も更に変に…
すみません…

とにかく、不安が大きい。なんたってフィオが指差した場所に書いてるのは…魔方阵。

とりあえず怪しい。とてつもなく。

「いいから立って!!」

無理やり、リオン様に立たされてしまう。

「な、なんなの？」

「はじめるぞ」

義父様、リオン様、フィオがなにやら呪文のような物を唱えだす。

と。

自分の体から黒い何かが出てくるのがわかる。

意識がとびそうになる…が、それも呪文によって邪魔されている。

もう一人の『自分』を見ている…へんな感覚。

地下十魔術Ⅱとてつもなく怪しい（後書き）

あるとです。

遅くなりました！！

いや、最近行き詰ってて…言い訳ですね、すいません…

登場？

「愚カナモノネ…人間ナンテ。私ニナンノ用？ 理由ニヨツテハ壊シチャウカラネ」

チアミノの人格が変わると同時に空気が重くなる。

「これはすごいな」

王が思わず声を漏らす。

「どっからどう見てもメデューじゃねえか」

「チーちゃん、聞こえてるー？」

メデュー人格のチアミノから微かな声。

「な、なんとか…」

「ん、じゃ、あなたに宿題」

「今から、こいつを操れるようにしろ」
メデュー

「目指すのは

？自由に人格変更

？力のセーブ

？メデューに言うことを聞かせられるようになる

位かしら」

「むっ…無理…」

さっきよりも微かなチアミノの声に、心配そうな騎士団。

「私ヲ操ル…？ 無理ニ決マツテルジャナイ」

メデューが高笑いするが、王はひるまない。

「さて、どうかな」

さつきとは違う呪文。

今度は…白い『気』。

悪意の無い、美しい『気』

それは、勇者アレンのものだった。

登場？（後書き）

あるとです。

生きてますよー！！ 遅れてすみません！！

なのに内容が変、っていう…

気付いたら

部屋に帰ってきた私は、ボーっとさっきのことを思い出していた。

「ありえない……」

ベットに寝転んで一人、呟く。エアリーもメアリーもない。

だって信じられないよね、地下に行っていた数時間で第二人格（アレン様の方）をセーブできるようになっちゃったんだから。

アレン様は、

「わけわかんないけど、確かにメデューが暴れたしたらこの子も大変だろーな。仕方ないなあ、じゃあ、私はこの子が頼めば出てくるから。適当に呼んでよ。私も外に出たいときは言うから」

とのこと。

つまり、入れ替わりたい時は変わらせろ。

その代わり、助けてやる。

ってことだよね？

ただ、メデューは：

「私ハ嫌ヨ。人間ニ指図サレルナンテモウンザリ」

そして笑ってこういった。

「気が向イタラ今度アンタヲ無茶苦茶ニシテアゲヨウカ？」

その場にいた全員が凍った。それほどに恐ろしい笑顔。

「それはさせないよ。この子はきっと私の大切な子になる。次にまた、私の大切な人を殺したら：：今度は封印なんて甘ったれない。殺すから」

アレン様が、冷たく言い放った。

『殺すから』の一言がとても現実っぽくて、本当に戦ったんだ、って思った。

あと、『次にまた』の意味…考えたら、すごく知りたくなってきた。

「アレン様？ あの、すこし聞きたいことが」

瞬間、『気』が私の中から出てきて『女性』の形を作り、私の横に座った。

「何？」

アレン様を前に、少し緊張しつつ口を開く。

「あの、アレン様。さっきの…」

「…その、アレン様って言うのやめて。なんかやだ」

「…はい。アレンさん、で、いいですか」

アレンさん(?)はちよつと苦い顔をしつつもまあいいか、と頷く。

「あの、さっき、メデューに『次にまた私の大切な人を殺したら』

って、昔も殺されたんですか？」

「…いきなりそれ？」

「あ、すいません！　いきなり過去にずかずか踏み入るなんて、ですよね…」

あわてて誤ると、アレンさんはにっこり笑って頭を撫でてくれた。

「これからパートナーになるんだっけ？　じゃあ、話したほうがいいな…」

そう呟くと、いきなり私の手を掴む。その瞬間、光に包まれ、周りが見えなくなっていく。

「見せてあげるよ。私達の関係。私の過去を」

気付いたら（後書き）

あるとです

お久しぶりです。

生きてます。

少しずつですが、スランプから抜けられるように頑張っています！！

大変長らくお待たせいたしました（汗）

塗り替えられた歴史

「今の歴史は、間違ってる」

真っ白な世界で、アレンさんの言葉に驚く。

アレンさん、綺麗だなー…なんて考えてたけどそれどころじゃなくなかった。

歴史が間違ってる…？

「あんたの中にいていたとき、あんたの記憶と私は繋がってた。だからたいていのことはわかんた」

…なんかちょっと恥ずかしい気もする…だって…ねえ？

「ビアンカっているよな？」

「チェーロのことですか？」

「…あ、やっぱ敬語もやめてくんない？　これから長く付き合うかもしれないんだしさ」

「…は、はあ」

ちょっと抵抗もあるけど…タメに直してみようかな。

「チェーロ・ビアンカ。彼は…私と同じ血が流れてる」

衝撃だった。

「今の歴史はおかしい。私は王家なんかじゃないし、世界初の魔法使いでもない」

「…え？」

「私の生まれるずっと前から世界各地に魔法使いはいたんだ。この国だって例外じゃない。確かに使える人は少なかったが、王族は大抵使えていたよ」

「…そうだったんだ…」

「歴史が変わってるのは、メデューのせいだ」

メデューのせい…？ どういうこと…？

「アイツは、王家を滅ぼそうとした。…助かったのは一番下の…末の王女だけ。そのほか、国の偉い奴等も死んで行ったよ。…国には…そのとき、大人がいなかった。いなくなったんだ。殺されて」

「…子供だけの国…」

「…そういうことだ。国には、大人がいなくなった。一番年上の奴が…確か、22, 3だったような…」

「に、22, 3?!」

「だから歴史をきちんと受け継げなかったんだろうな。その前に会った歴史書も燃えてたし」

そんなことがあったなんて…

「私の魔法は後天的。メデューに出会ってから目覚めた。ここですでに違うだろ？」

にっこり笑って私を見る。自然に頷く私。

「今の王家はそのとき生き残った末の王女の血縁。私の血は…私は結婚しなかったから…弟の家系か。ま、血は似たようなもんだ」

「それが、ビアンカ家…」

「あいつ等の魔法は上手くできてないだろう？ 弟も魔法が使えたんだが、弟も後天的だったからなんだ」

「ああ、なるほど…」

「とりあえず、歴史は間違ってる」

よく分からないまま締めないで欲しい。

「あの、よく説明してくれない？」

「…私の過去を見たらよく分かるよ。結構昔のことだから記憶にたどり着くのに時間かったな…モウすぐ、私の生きていた時代の記憶にたどり着く」

全然気付かなかったけど、私達を包み込んでいる光は動いていたらしい。

…周りが一段と明るくなり、何も見えなく…なった。

塗り替えられた歴史（後書き）

あるとです。

過去修正って難しい…

真実は・・・

「アレン!!」

その一言にハッと目を開ける。

そこは…城下町。

過去だ。アレンの…記憶だ。

呼んだのは、アレンのお母さんらしき人。

「お母さん」

後ろから声が聞こえ、振り向く。そこにいたのは、16, 7歳くらいの白髪の少女。おそらく、アレン。

一直線に向ってくる。

ぶつかるっ!! っと思っただけ… するっと私を通り抜けた。

「…どういふこと? 私…存在してないんだ…そういうことでしょ? アレン…」

横を見ても、どこを見ても、アレンはいない。

「…え？」

「リー！！」

『アレン』が呼んだ子は…黒髪の、とっても綺麗な子。

黒い髪に黒い目。そして、透き通りそうな白い肌。

「リー、そろそろご飯にしようって、お母さんが」

「ありがとう。いつもごめんね」

「そんなのいいよ。もうリーは私の家族なんだから」

「本当、皆には感謝してる。こんな私を助けてくれて」

「いいって。私にとってリーは親友で、家族で、大切な人なんだから」

「アレン…」

めっちゃくちゃ仲のいい2人。黒髪と白髪。正反対の二人。けれど気の合う二人。

本当に、そんな感じ。

と…

また、光に包まれ、目の前が真っ白になった。

真実は・・・(後書き)

あるとです。

明日からしばらくお祖母ちゃんの家に戻るので、更新出来ません…
では。

見つけた

白い光が消えると、そこは崩れた家や怪我をした人々であふれていた。

「何、これ…」

あたりを見渡すと、さっき見たアレンの家を見つけた。

崩れた家の前に立ち尽くしているアレンとリーも。

アレンの口が小さく動いた。

「お母さん…!!!!」

崩れた家の中に入って行こうとするアレンを止めたのは…リーだった。

「アレンっ!! ダメよ!!!!」

「何でっ?!?!?!」

アレンがリーの手を振り払い、走り出そうとしたとき…地面が、揺れた。

「「「!!!!!!」」」

地震――

「ほら!! 　まだ余震は続いているの!! 　今入ったら危ないわ!!」

「っ――!!」

思いとどまるアレンの目から大粒の涙がこぼれる。

「なんでえ? 　なんでこんなっ……!! 　お母さんがっ……!!!!」

崩れ落ちるアレンの肩を抱くりー。

突然、リーが私を見た。

おかしい…この時代の人、私が見えないはずなのに…

振り向いた私は、リーがこっちを見たわけがわかった。

向こうから、ゆっくり歩いてくる一人の女性。

どこことなくリーに似ているけど、圧倒的に違うのは、その冷たい目。

美しい黒髪を風になびかせ、不敵な笑みを浮かべながらリーに向かってまっすぐに歩いてくる。

「どなたですか」

立ち上がったリーがその女性に少しきつめの口調で聞く。

「アナタヲ、探シテイタノ」

彼女が歩いてくる間も余震は続く。

「…え？」

一瞬、リーとその女性の間だけ、時間が止まった。

その女性がリーに向かって手招きをする。

「見ツケタ。帰ツテオイデ：私」

見つけた（後書き）

あるとです

気付けば前更新から2週間くらい過ぎてるんですね…！！！！

本当に申し訳ないです…

遂にあるとの本性というかマイペースが出てきたようです…。

メデューとは

「帰ッテオイデ」

その一言でリーの体が一瞬震えたのがわかった。

その瞬間――

二人が黒い光に包まれる。

その光が消えた時、その女性は消えていた。でも……

リーの目が、あの女性と同じような恐ろしさのある目に変わっていた。

「……メデュー……？」

そのリーはまさにメデューを連想させた。

2人が同一人物だとしたら……今、二人は1人に戻ったのだろ

う。

「アレン・・・」

リーの呟いたその声は恐ろしいほどに冷たくて。リーの声ではなかった。

それはアレンも思っただらしく、

「・・・リー・・・？」

驚いた表情で振り返る。

けれど、私達はリーの次の言葉で更に驚いてしまった。

「あなたはいつかお父様を殺すのよ。だから・・・今、私が殺すわ」

確かに、このリーは・・・メデューだ。

つまり、リーはメデューの分身で、メデューはその『分身』を探しに来た。

じゃあ、リーはメデューから逃げてきたってことになるのかもしれない。

そして、メデューはリーを見つけ、1人に戻った。

だから、今ここにいるリーはリーではなく、すでに、メデューとなってしまったということ・・・？

それに、今、メデューが言ったあの言葉・・・

メデューは知っていたんだ。

アレンがいずれ、勇者となることを。

メデューとは(後書き)

あるとです。

夏休みの宿題が終わらず困っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4547q/>

3輪の花

2011年9月15日11時38分発行